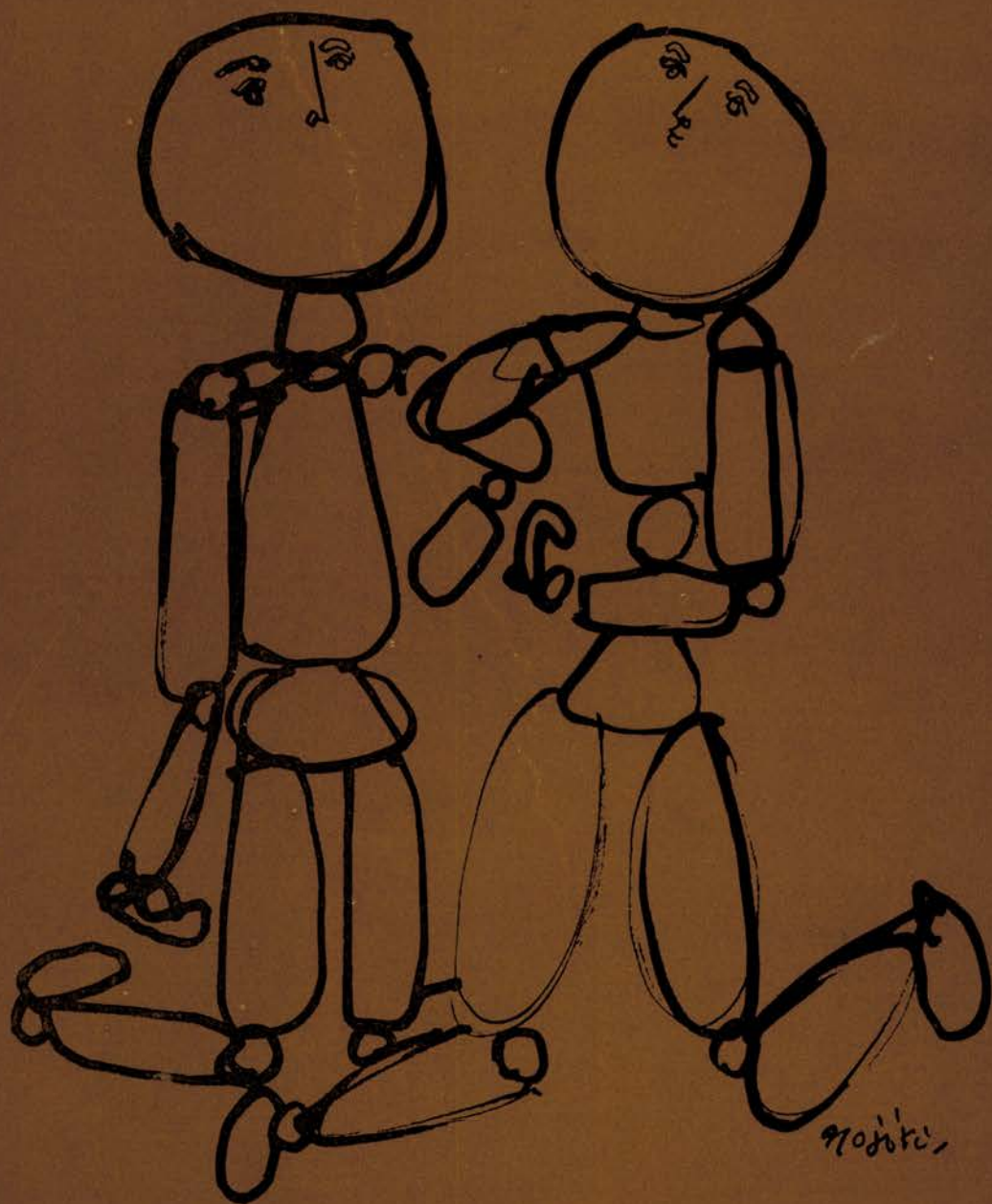


証の雅集



麻生路郎☆主宰

二月号

No. 417 Pensoj flugas trans la land-limon
THE SENRYU ZASSHI

川柳雑誌社主催

3月本社句会

兼題
リーダー
内紐
手頃

本社二月句会

★千日前へ会場が変わりました。

明るさ、暖かさ、川柳ムードは満点です。

日時 二月七日(水)午後六時

会場 自安寺 (211) (一四七八番)

大阪市南区千日前電停東スグ北側

兼題 「雲行き」 (三句) 麻生路郎選

(路郎選に限り七時半〆切)

「良縁」 (三句) 戸田古方選

「年下」 (三句) 黒川紫香選

「ノイローゼ」 (三句) 吉田圭水堂選

席題 三題(当日発表)

中島生々庵

呈賞 ☆各題天位・☆各題天位から路郎選により不朽

洞賞

会費 百円

幹事 紫香・淡舟・いさむ・潮花・文秋・甫佑・狂二

・与呂志・白水・水洞・すゝむ・藤風子・柳宏

子・舟遊・一三夫

★投句だけの方は郵券三十円

同封(〆切二月五日)

大阪市住吉区万代西五丁目廿五番地

川柳雑誌社句会部

電・大阪 六〇八一

日本盛酒坊

和やかに まず一杯

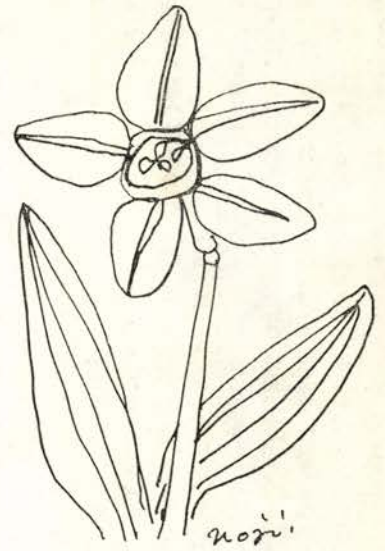
東京酒坊・八重洲口名店街
大阪酒坊・御堂筋道頓堀橋南詰



灘の清酒
二ホンサカリ

不朽洞句帖

麻 生 路 郎



虎の面に題す

李伯という友あり 遠きむかしにも

スキー林立 老人を寒がらせ

盗作がバレて故郷も狭いこと

長男も次男も 山に奪われる

山のメモだけを遺した山岳部

遭難のそのちははへ山は晴れ

九里丸さんを悼む

家内が待つとりますのでと急ぎ近く

前号正誤

用が済んだら殺し屋も消されてた

川柳雑誌 二月号 目次

題字……麻生路郎・表紙……野尻弘

不朽洞句帖……………麻生路郎……………(3)

前門秘帖……………東野大八……………(25)

作家と環境……………八木摩太郎……………(38)

浜町生まれの三川柳人……………塚越迷亭……………(15)

川柳に強くなる本

雑吟について……………北川春巢……………(28)

課題吟について……………清水白柳……………(32)

みち……………戸田古方……………(17)

川柳名句と難句……………麻生路郎……………(4)

句会と川柳基本法について……………直原七面山……………(20)

窓口談義……………麻生路郎……………(18)

★現代柳人録……………(27) ★川柳書架……………(14)

句評リレー……………没食子・日満……………(26)

川柳における雅号について……………北川春巢……………(12)

★不朽洞の人々……圭水氏の巻(37) ★不朽洞賞三年連続獲得……三夫……………(33)

虎御前……………富士野鞍馬……………(24)

花月亭九里丸氏逝く……………不二田一三夫……………(40)

★……………麻生路郎……………(6)

川柳……………諸……………(11)

同舟近詠……………麻生路郎……………(20)

近作柳……………北川春巢……………(40)

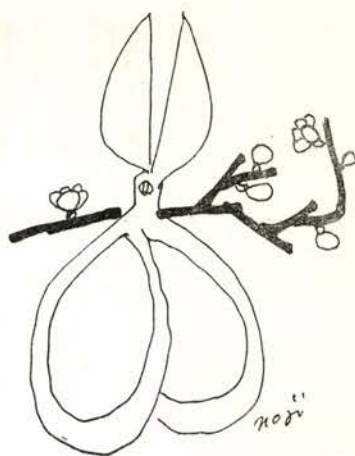
金泥集……………麻生霞乃……………(41)

各地柳壇……………若本多久志……………(34)

★柳界展望……………野村味平……………(35)

一路集「テーブル」……………伊達堰子……………(46)

★柳柳室……………(46) ▼ペンの散歩……………(46)



川柳 名句と難句

麻生路郎

〔二六〇〕

つまつたら母校を訪えよワシが居る

(竹青)

世の中は学校とは違う。難関は次から次ぎへとやって来るものだ。壁に突き当たってニッチもサッチも行かない時には必ず母校へやって来い。そこには、相談相手のワシが居るぞと云う教師の温かい心情を詠んだもの。しかし、鉢巻めめて賃上げ斗争ばかりに狂奔している先生方には、こんな言葉は吐けないだろう。

〔二六一〕

老夫婦坐る間へ猫坐り

(遠二)

よく見かける情景だ。

老夫婦には、これと云う話題もない。平凡凡な、その日その日が過ぎてゆくばかりだ。その二人の間へ、猫が来て坐わる。

「星をやったのかい」

「やりましたよ」

話はそれっきりである。

動きのない動きが感じられて面白い。

〔二六二〕

死期なのか苦労をかけた礼を云い

(尚史)

「お前にも随分苦労をかけたな。床にいてからもムリばかり云うて」と病人は、いつになく、真顔になって妻に礼を云った。

「あたりまえですよ。妻が看護するのは」「それに、その日その日の暮らしまで心配さして、すまない」

と、病夫は眼に涙を浮かべて礼を云った。

いつもは強い夫が、いつになく、苦労をかけた礼を云うようでは、もう死期が近づいたのであろうか。そんな思いが、通り魔のように脳裡にうかんだのである。人情の機微をつかんでいる。

〔二六三〕

月の裏みたいな肌へ塗りたくり

(一鶴)

既に中年を過ぎた女であろう。みめよき女でないことも想像される。みずから美しい女でないことを意識するので、塗りたくる気にもなるのであろう。塗りたくれば塗りたくるほど醜く見えることに気づかない。そうした女ごころの哀れさを思わされる句だ。

「月の裏みたいな」は月の裏と女の肌との比喩で、どんな醜い肌であるかを誇張法で表現している。

「塗りたくり」も亦、実際以上の描写であるから、この句の構成はすべて誇張法で出来上っていると云えるであろう。

〔二六四〕

恋とや言わん胸病む人と知りながら

(湖山)

なんとなく好きだ。忘れられない。つい親切にする。親切にされる。その人は胸を病んでいる。伝染するかも知れない。だからと云って、その人から遠ざかる気がしない。どうした訳であろうかと自問自答する。「恋とや言わん」の上七がよく利いている。

〔二六五〕

童話劇PTAはござの上

(徳子)

実感をそのまま紙の上に載せた句だ。我が子等の演技に陶醉するPTAの人達がござの上から送る拍手が眼に迫まるようだ。下五の「ござの上」がこの句を生き生きさせている。

〔二六六〕

ゴルフ場向うの田では稲を刈り

(愛鳩)

悠悠とゴルフに遊ぶゴルフ族と、シシとして農作族との対照を詠んだもの。「向うの田では」と同情を禁じ得ない心情を強く打ち出している。

近ごろでは日本の到る処に、ゴルフ場が出来た。狭い日本の山野や田畑を一部の人間の球技のために狭はめてもいいものであろうか。

ゴルフはスコットランドで発達、ボールをクラブで打ち、ホールに入れるまでの打撃を争う球技である。わが国ではもともと費用の点から、アッパークラスや有閑階級のものだったが、戦後は社用族が出入りして一種の虚栄を充たすようになり、今ではそれ以下の猫も杓子もやるので、ゴルフをやってまんねという虚栄なんか、スッ飛ん

でしまった。

〔二六七〕

悲しき習性おごられていて計算し

(酔夢)

この句のような習性を持った人は男にも女にもいるが、女の方が少し多いのではなからうか。作者は女流作家であるが、悲しき習性と断案を下している。たしかに、そうかも知れない。

おごりかえすための計算だとすれば詰らないことだし、とてもおごりかえせぬようなご馳走なれば、バカバカしい計算だし、こんな習性はたしかに悲しき習性に違いない。作者は弱い人間性の一部に鋭利なメスをダサと突き刺している。

〔二六八〕

毎晩のようにテクテク歩く夢

(九里丸)

病臥して、歩行の自由がない。もう再び起てないのではないかと思うと達者で駆けずり廻っていたころがなつかしい。と詠まれたものであろう。そうした人の夢だけに純な童心さが漂っている。この句は作者が近況を卒直に句にされたものと思ひ、涙して読んだ。

〔二六九〕

木俣館にて

山椒魚お女郎上りが病むに似て

(一瓢)

山間の溪谷に住む醜い姿の山椒魚が水族館の岩の隅に死んだように静かに横たわっ

ているのを眺めて、お女郎上りが病んでいる醜い姿と見たのである。こうした比喻で、山椒魚の陰惨な醜い姿を一段と浮び上らせている。

山椒魚は広義の大山椒魚と狭義の山椒魚とあるそう。この句の場合は大山椒魚であらう。筆者は三重県の赤目の溪谷で捕えたのを見たことがあるが、深淵に住んでいるために目はあっても見えないのだと聞いた。山椒魚は両棲類で有尾目に属している。産卵期以外は陸に住んでいるそうだが筆者はそんなのは見たことはない。いもりと違つて腹面は赤くないと云うことだ。大山椒魚の方は最大のものは一メートル以上もあって、終生水中生活をしているそう。

〔二七〇〕

ふところへ御飯こぼした老哀れ

(麦太楼)

年はとりたくないもの、耳は遠く、眼は薄くなる。鼻水は出る。口へ運ぶ御飯がバラバラと落ちて、ふところへ這入る。ジジむさいかぎりだ。われながら、その老いぼれぶりを哀れに思った心情がよく描き出されている。

〔二七一〕

持って来る釘大さすぎ小さすぎ

(堰子)

「あなた、釘打つてよ」
「ヨッシャ、釘打つておいで」
妻が、道具箱をガチャガチャいわせていたが、
「ヘイ、釘ッ」

と、さし出した釘は大きすぎた。こんなアカン。板が割れてしまう。「では」
と、さし出した釘は小さすぎたと云うのである。なんでもない家庭の一コマであるが、うまくキャッチしている。

〔二七二〕

子の風呂は長こても短こても叱られる

(杜的)

「また風呂で泳いだんやなア」と凶星さされて叱られる。手の指も足の指もほどびているので、すぐバレル。

遊ぶのが忙がしいので、手拭を濡らしたかと思うと、もう風呂から飛び出す、烏の行水である。風呂は「タダやないぜ。アホよう洗うて来んかい」と叱られる。これこそ私たちこども時代をズバリと詠んでいる。今でもそうだろう。穿ち得て妙と云える。

〔二七三〕

せつなさよこの世に軍歌あるかぎり

(きさ子)

「勝つて来るぞと勇ましく」という軍歌が日本全国津浦浦まで謳われた時代があったが、物の美事に勝つては来なかった。それから日本はバチ、バチ、バチバチとバチンコの日本になった。この句は戦争未亡人の心理を穿つたものであろうが、せつなさは戦争未亡人に限らない。私達は何故人間同士が闘わなければならないのだろうか

と思うと、せつなさを感じずにはいられない。

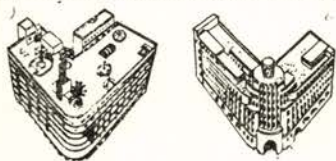
〔二七四〕

古物屋の瑞宝章は五百円

(露児)

戦後、古物屋で、ホコリにまみれた瑞宝章が五百円で売られているのを見て、タラタラと涙を流す人もいるだろうし、孫のおもちゃにもならないと顔をそむける人もあらうし、こんなものを胸にして誇りを感じたオレはバカだったと時代の推移に、うたた感慨をもらす人もあらう。人間たるもの勲章なんかに甘く見られないことだ。

勲章は国家に対する偉勲功勞のあるものに授けられる勲章である。一八七九年に賞勲局を設置し、菊花・宝冠・旭日・瑞宝・金鷄等が出来、それぞれに階級があり、年金を附属した。一九三七年には文化勲章などが出来、一九四七年には金鷄勲章が廃止された。公式の式典などでは勲章が物を云つて序列がきめられたものだ。



「お買物」
は近鉄で!!



アベノ上六
近鉄
アベノ77-8331
上六77-3331



臍くりを女にのろてまたとられ

大阪市 市場 没食子

西宮市 若本 多久志

このファイトだけでは越せぬ十二月

労組へも訴えてみる金詰り

過労ですと痛いと言われ

ボーナスも渡してしもた気のゆるみ

大阪市 正本 水客

招待はここまでというハイヤ呼ぶ

新調の肩を叩いて叱られる

気の利かぬ父がなかなか寝よとせず

高槻市 丸尾 潮花

逢いに行くあたを風につぶされる

盃も持てぬ仲居も入る師走

大阪市 西 いわを

シャボテンにさわったようなお嬢さん

税金が心配なほど儲けたい

大阪市 北川 春葉

アパートへ別居お餅をもて余し

肝臓を指さし猪口は受けるだけ

沈没をする気でイブを飲み歩き

八十は医者も見守るばかりなり

ワイマル 羽佐間 柳葉

豁達の気性も金に萎れたり

人権も下に行く程弱くなり

堺市 吉田 圭井堂

還暦を迎う

医者に手を握らさぬ儘赤ベレー

口だけはまだ還暦に程遠く

還暦に髪黒々と夢多く

還暦に分解掃除のドック入り

値下りのショックと決めた聴診器

キャデラック今日は手形を延ばしに来

防府市 長野 井蛙

ぼろ糞に言う辯亭主の肩を持ち

金になる傷はチンピラ派手に巻き

どん底へ落ちて女見栄を張り

岡山市 直原 七面山

法的根拠がなどと役人そり返る

ボス淋し死出の旅路に供もなく

金策の旅でも女こさえて来

ミコヤンを送って警察ビール抜く

文化講演見栄で聞くのもいるのなり

仲秋の名月

死の灰のことばにはふれず月を愛で

大阪市 西森 花村

交差点下割かけた程つまり

病魔よ今夜も語り明かすのか

逃げ腰の医者を気の毒とも思い

病院も営業だったと気づく頃

鳥取市 河村 日満

ふくれ面のまんま一対一で会い

社長以下鉢巻他流試合めき

若い娘を備い僕まで若返えり

豊中市 足立 春雄

事故千人赤青黄もついでいて

やっぱり君も目あてのあった友情が

倉敷市 木村 千容

得手勝手義理人情ヘソツボむけ

寿命またのびてうれしい二人です

お通じといわずありましたかと妻

夢でさえ上りの汽車に乗りおくれ

大阪市 木村 水洞

リバイバル進軍ラッパ聞こえそう

本当の個性憎しむ時に見せ

火事と事故増えて年の瀬らしくなり

法律をちよっとかじって尻に敷き



大阪市 真鍋一瓢

岡山市 浜田久米雄

ごまかすこと上手に覚え課長補佐

エロ談義で仲居銚子を替えさせる

十二月お世辞の出ない顔ばかり

老猫は雑誌の上に長く伸び

マダムまたお出かけアンブル一つ切り

旅たのしよろめきそうなのと座り

奈良県 西辻竹青

ミンク豪奢に着て貞操は鷲毛に似

もすこしで すねが出て来る宿浴衣

ウインクで座席一つを取らされる

大阪市 後藤梅志

出雲市 尼 緑之助

倉敷市 松村万古

護国神社参詣人の影も絶え

床柱立派に禿げたのが座り

一線のアラ聞かされる塾の主

ふとしたことが糧となり夢となり

出雲の張子虎

ガムを噛む事も許さぬ塾でよし

日めくりの釘に十ほどゴムバンド

よく売れるわけがわからぬ張子虎

妻の座を守り通した座りダコ

流行りとはいえゴムの木をここも置き

善人の足を師走の風が追い

岡山市 服部十九平

米子市 小西雄々

ちっほけな幸へ年金の扶助料の

風采は堂々恐妻とは見え

ボーナスの話題へストープ赤く燃え

俺も役人ならそんなこと言うでしょう

不動産あるかと子供から聞かれ

番頭の眼はちくはぐな夫婦に見

宴会も仕事の内の十二月

冗談に姐御と呼んで睨まれる

味のよい店を知ってる小市民

鳥取市 杉谷湖山

割勘のすき焼猫舌必死なり

大阪市 山川阿茶

まだ換算する癖がありキロ、センチ

賄賂拒否話せぬ男と嘲られ

しんとして手向けの曲をどじって来

吾れも亦伝えん古老の話し聞く

尼崎市 長谷川三司

クリスマスイエスにすまぬ事とする

顔じゅうを皺にし一本の歯をたより

神経痛 二句

大阪市 金井文秋

しがみつ捨てないでにも嘘があり

腰もんで居ながら猪口がはなされず

ベレー帽平気がかぶるから似合い

幼稚園病氣も貰うところなり

同病と見て温泉で話しかけ

誘導にかかり易者へ皆しゃべり

本名はこの人だけに呼ばしとき

西宮市 若林草右

もろて来たものまで母に売る気なり

葉書で済む用をわざわざ泊りがけ

千年の薨は台風をやります

中年は求人難へ売れ残り

がめつさが恋も情も捨てつちまい

坪五万の空地に塵の山があり

加賀市 那谷光郎

奈良県 飯降白香

広島県 山田季賛

味噌汁に蠅が浮いてた朝を揉め

味増汁に蠅が浮いてた朝を揉め

嘘を言う苦勞先方は知つとらず

やれやれと茶席すまして来て番茶

まだ地金出さず姑がほめる嫁



核実験さわぐ地球へ月が照る

貧しさに今日も勝ったか今日も無事

退職をすれば病魔がつきまとい

大阪市 山本 葉光

御無理ごもつともで通ろうとする古さ

使い馴らした艶の年月

岡山県 田村 藤波

人生の日暮へ慌てまい用意

漢学を教えて名士村に朽ち

面子を言う子になって手がはなれ

幸福の逃げて冷たい絹の足袋

岡山県 本田 恵二朗

コスモスの風情でまんまと飼育する

寅年の妻へ押売り歯がたたず

木枯しの死角にズラリ靴磨き

京都市 松川 杜的

子に甘い父と云われてそれでよし

京の街寺から寺へ虹が立ち

日本地図開けてボーナスの前景気

血税を総理の娘までが使いおる

鳥取市 森本 法泉子

独身へ今夜も宿直押しつける

傭員の器用ここにも棚が出来

宴まさに酣上席放つとかれ

堺市 高崎 雄声

夏草の茂る力に眼を見はり

あばれてみても持っていない哀れさ

島根県 藤井 明朗

斗争が妥結焼いも売れ残り

年始からもう大トラで帰って来

メ切りが迫るクイズへ妻の知恵

岡山県 永松 東岸

十二月の結婚記念日を忘れ

同権と云う出しやばりを持てあまし

鼻歌で試験勉強して御座り

パチンコ屋都心にすでに根をおろし

倉敷市 野田 素身郎

たかが靴一足買うに夫婦連れ

世話好きが又香簍を集めに来

卓上日記忘年会の日が続き

クリスマスツリーに床の間ゆづった池の坊

大阪市 清水 望峰

さむかろと鳶職を見る懐ろ手

すりにでもなろか思う年の暮

誰が買う数の子かしら売っている

大阪市 伊達 堰子

鐘聞かぬまま法隆寺帰るとし

無情 二句

ことぎれしあと降りつのるトタン屋根

霊柩車去る街は福引き歳の市

大阪市 不二田 一三夫

つり銭に似た人生もおもしろし

肩落とすうしろ姿は見せるまい

人の事がまあってやれぬ世がさびし

家庭円満そとではモテぬ夫婦にて

兵庫県 酒井 ひか平

空景気で株屋トラ年迎えたり

当り籤一度は指の先に触れ

その手では金は持てぬと占われ

芦屋市 丸川 初甫

路地の菊すねた女の様に咲き

一生の願いしよつ中云うて来る

一家心中へ屋根のアンテナ眼にとまり

死の灰の雨とや恐い傘を借り

アレクサンドラ王女来訪

七十五着を九日で割って見る暇

唐津市 新岡 回天子

高血圧五十台とはちと惜しい

こんなにも暇な人居るパチンコ屋

岡山県 池田 古心

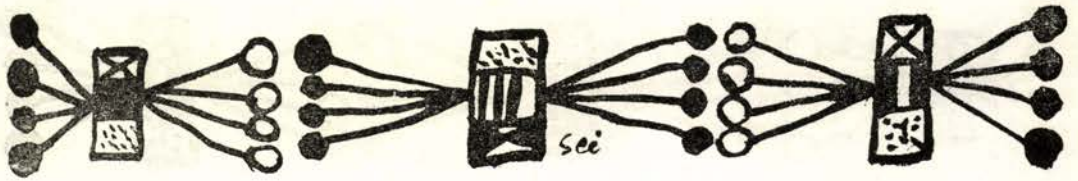
調法は口なり貞婦の如き言

大阪府 早川 清生

子を五人育てきたないもの知らず

職変るべきか木馬に腰おろし

滞ソ幾年物思うとき日本語



余燼の中で保険屋につかませる

堺市 辻 圭水

年末と云うに辞令は用捨なく
顔もよし心もよくて背が低し

西宮市 小浜 牧人

魂胆を秘めて飲みなはれ飲みなはれ

チップはずんでネームバリユを損なわず

御田満のぞけば爪を剪らせてる

見舞われて瘦せる腕を引込める

池田市 前川 左文字

喉の傷口因縁ある美人

枯落葉白亜の偉容あらわせり

ボーナスが無傷で帰るたよりなき

百貨店ついでに数の子拜んで来

岡山県 池上 知恵美

気安めの言葉が欲しい歳になり

欠点も知れて逢瀬の度を加え

大阪市 橘高 薫風子

莊嚴ミサ (豊中カソリック教会)

聖夜の餐神父の靴は常のまま

クリスマス トマトの赤も異宗めく

莊嚴ミサ 嬰兒祈らず神に近し

下関市 中村 九呂平

目の玉の飛び出る河豚に途中下車

忙中忙見合写真が入れちがい

大阪府 榊本 落児
小説「課長さん」

四十すぎ恋とはかくも苦しきか

院内運動会

うどん喰い競技女とおもわれず

大阪市 西川 晃

釜ヶ崎風景 二句

女ではないのをおかま悲しがる

いとけない子の貯金まで飲んじまい

香林夫妻を思う

手を曳かれ何処の山河を行くならん

鳥取県 田中 蛙眠子

畏くも神話に反逆する生徒

十二月美女は借金とりだった

神戸市 仲 どんたく

女房が年じゃ年じゃと牽制し

まだ傘を別々にさすほどの仲

訓練の消防てきばき消して見せ

当方は独身秀才家もあり

共白髪夫婦喧嘩がまだ止まず

平田市 久家 代仕男

落葉散る音傷心に和す如し

改築も見ずに移いだ隠居死に

方言が出て村芝居どっと湧き

大阪市 鈴木 多柳 志

十円の葱を見せあう市場籠
又かいなと国寶へ奈良の鹿
許容量ぎりぎり云う雨にぬれ

西宮市 野呂 鶴汀

子の寝顔叱った事を後悔し

恋破れもうこの街に用はない

神様の様なお人をけむたがり

テレビ買ってやっと話題の仲間入り

阿呆みたいなシャツを着たがる年になり

坪万の地に草生やす板囲い

家業つぐから云う事を聞く子と云われ

高砂市 吉原 紅月

毒舌も肉身だからすぐ忘れ

結局は亡父と同じ道に生き

大阪市 石倉 旅風

好き同士原爆臭い世に生きる

親に似て言い訳をせぬ娘に育ち

搾取とは判っていてよう辞めず

大阪市 魚住 満潮

続西成界わい

地下鉄で会ったは空襲以来なり

人員点呼昼飯の金渡される

泥棒ごっこ神妙に縄かけられて

血を売る列に夫婦が並んでい



百円を貸してもらうに顔を借り

ドヤに寝て革命の夢まだ捨てず

高校へ行けとは父もよう云わず

あんたも達者でな一と置手紙

名は忠孝全国指命手配なり

愛媛県 村上旭童

焼いもの匂いの中にある故郷

夜も働けと耕耘機のライト

誰とでもねる子に育つ不倖

はげを気にせぬ男の偉大さを見つめ

鳥取市 北村三歩

忘れてたわけではないが十二月

きりつけておきたい話十二月

サンタさん待ちくたびれた子の寝顔

薪割りに二段の腕を見せてくれ

神戸市 傍島静馬

いんぎんにきいて歯科医はかきまわし

歯車が外れたような倦怠期

冬物を早目に見切る暖かさ

岡崎市 木山遠二

節酒するそれからこっち友が減り

チャンづけで豚が老夫婦に飼われ

損得は知らず五六羽鶏を飼い

レジャーブーム国史会なんかも生れ

大阪市 村山光輪

師走月走りたいのはこっちだす

布施市 森下愛論

知性ちらつかせて可愛いシット

借金をかえして帰る脚に張り

姫路市 植村客遊子

星一つ目当て夜釣の櫓臍鳴る

駅長になれば助役の頃恋し

大阪市 河井庸佑

団交をとほけて逃げる手をつかい

山みえた頃のこのこと顔を出し

初釜へせいっぱいを着かざらせ

我が子しか写らぬ親の目に弱り

年の瀬を犬までこぜわしく走り

大阪府 谷沢好祐

高ければ池田に言えと八百屋まで

ポナスで出すと時計を入れて飲み

縫いに出す晴着へコネの要る師走

末っ児は我が家の有望株らしい

泉大津市 高津徹也

三毛猫にネオンが降ってきた聖夜

山道を山の子として歩く姿

ひげ剃りの鏡の中へ来訪者

夕焼けが僕の与げた指輪にはねた

愛媛県 横紫光

柔道の腕はかくして嫁にゆき

秘訣などないと長生きそっけなし

税金で植えた街路樹もう折られ

退職をしても旧部下まだ叱り

青森県 工藤甲吉

座談会ではこの辺でビール出る

ナポレオンのように居眠りする社長

マスカットその美しき口に入る

くちづけをついに許した霧の中

一人娘に養子を迎えて

よろこびは我が家に茶碗一つふえ

花嫁になった吾が娘をまぶしく見

松江市 小林孤呂二

礼状の来ぬ小包へ気をつかい

死の灰へ夫婦喧嘩もしておれず

完納の農家しずかに冬を待ち

松江市 舟木与根一

就職をして未亡人若くなり

おとこ替えるたび小道具まで替り

長期療養四季咲きの鉢をおき

豊中市 林夢虹

一月一日昨日の道と同じだが

心斎橋^{ひと}他人の歩調で歩くなり

西宮市 山本一傘

消費ブームへうちのおっさんのんき過ぎる

十二月男は喧嘩して戻り



七十年お疲れでしようと言ふ寿命

社長が死んだらあととはがたつとくる会社
使われるのが嫌で始めた焼屋

京都市 室井八九寸

舞台見てる妓を舞台からぬすみ見る

勘どころない喝采に苦がる歌手

ひかえてるという血圧の飲みっぷり

大阪市 今西生薑

すぐケチをつける根性がうとましい

飛田附近

蟹のようパンパン何ん本はさんだと

岡山県 横山一声

ボーナスの行方を妻に説明し

値上りブームへやみ米だけは下って居

小松市 関戸宗太郎

労組も会社も他社を例にとり

おもい切り叩け平和の鐘ならば

石川県 高山涼髪

マダムの瞳お釣りよろしと云わすなり

湯ざめせぬうちにと夫の先に寝る

十二月八日の日本は強かった

借りたのを払えど貸したのがとれず

美称市 安平次弘道

暴落で株屋の賀状はさいて捨て

不要でも規定で資料をとる役所

養老院選挙が匂う餅が着き

宇部市 平田実男

人情を置いて掛取り家を出る

十代の恋は一直線に燃え

酔うてしたキッスが女をこうも変え

両親が死ねばトゲトゲしい実家

大阪府 高橋尚史

俺の娘がホテルのマッチ持っていた

家庭的夫でしてと敷いており

水増の被害へどつとくる見舞

白票のままで入れとく無関心

同舟近詠

大阪市 橋本緑雨

古い寺すすきの中に建っている

割箸で力の入らぬ焼魚

このあたり温泉が出るとよい景色

兵庫県 戸倉普天

農協に任せて米の値知らず済み

乏しけれど我れに山羊あり卵あり

滑川の気持ちか田圃の穂を拾う

長野県 高峰柳児

床柱汚職の毘の猪口が派手

もうこれで産まぬと産婆もきかせられ

ベル押して威儀を正せば吠えつかれ

和歌山市 秋月宏方

平和とは月にもさんをつけて呼び

株価また下がり血圧また上り

提灯になるとはふぐも露知らず

インタン震えてるなどメス思い

親しみのあるおっさんのだんご鼻

大洲市 米沢暁明

ひよろひよろの影が私の影だった

噂ではどれくらい金で御入学

年寄りの死ぬのを待ってたよう電化

自家用車どころかタクシーにも乗れず

新居浜市 月原宵明

オーバーの袖は通さぬ愚連隊

普請場はいつでも焚火燃えつづけ

倒産をした店頭が香具師の位置

妻であるサクラがピース喫いつける

日の丸を拝む心を子は知らず

ストの旗巡業相撲の旗師走

闇の夜は妻の用心棒にされ



川柳における

雅号について

北 川 春 巢

人の名前については多くの調査統計や研究が発表されているが、名前は親が付けたもので、たとえその名前が本人の気にならぬ場合があっても、これをむやみに変えるわけにはいかない。しかし親たるものは誰でも子供の命名に際しては、その子が将来健やかに成長し幸福に暮らせるようにと祈っているのである。以前美智子妃が皇太子妃と決った時、私はこの美智子という名前が親たるものの端的な希望を現わした、最も庶民的な名前であるという意味のことを柳話の時に申したことを記憶している。女の子が美しく賢く(智)成長するようにとの親の夢である。当時私の病院の看護学院の学生四十五名中に、この同じ美智子という名前の学生が三名もいたこともお話しした。また男の子であれば、健太郎とか、賢五郎だとか名付けるものと同じ心理であらう。

う。親の名前を一字とって、豊臣秀吉の子が秀頼、徳川家康が家光、その子が家綱などというの、頼や光、綱などに、子に対する何がかの親の願いがこもっているのであらう、と私は思っている。

ところが、川柳の雅号の場合には、これは自分が勝手に名付けるのであって、本名の場合とは趣きが違っている。日本一の川柳家になりたいたか、自分が日本一の作家だとか、希望なり自負なりの雅号をつけたって一向差し支えないのである。私の調査の中には、そんな雅号は残念ながら余り見当らなかった。川柳人だからというので、「柳」の字をとって、それに自分が親から貰った名前の一字をつけた(と思えるもの)り、(この中の「柳」というのがあるいは、川柳が一番うまいと自負した雅号と取れぬこともない)あるいは自分の先生の名の一字を貰った(と思える)ものが多いようであ

った。中には、川柳は遊びのためにやっているのだから、とでもいうように冷やかしかし半分の雅号も以前には少なくないように思えた。例えば剣花坊などという雅号は、文字は立派だが、これは漢字の表音性を利用して「喧嘩坊」をもじったものであり、また角恋坊は「隠れん坊」をもじったものと見られ、いかにも風流を弄んでいるという感じである。狂歌における宿屋飯盛とか元木網などのふぎけに似て、狂句臭の甚しいものである。こんな雅号が、川柳を世人に誤解させる一因になっているのではあるまいか、と私は思うのである。しかし最近はこのような雅号は次第に少なくなっているのは、川柳を真面目に考える人が多くなって来たという証拠のようで、同慶にたえぬ所である。

川柳の雅号は、本名の一字をとるとか、ともかく本名と関係のあるとか、二

りそうなのもあることは前述の通りであり、この本名の移り変わりの研究を満田新一郎氏が発表されているので「言語生活」昭和三十六年七月号) 先ずそれを紹介し、ついで私が調査した川柳における雅号の移り変わりを紹介しようと思う。

第一表

生 年	郎	お	一 字 名	数 字 名
一九〇〇—一九〇一	二八・〇	五・五	四・二	七・六
一九〇一—一九〇二	一三・四	一・八	一五・〇	一一・五
一九〇二—一九〇三	九・四	三・三	三三・一	一〇・〇
一九〇三—一九〇四	七・〇	二・〇	一九・六	二二・七
一九〇四—一九〇五	四・七	一・八	三・〇	一一・一
一九〇五—一九〇六	四・五	一・四	三・二	七・六

これは名前の一番下につく字によって分けたもので、表の「郎」というのは、太郎、次郎はもちろん前述の健太郎、賢五郎などのようなもの。「お」というのは、雄夫、男がつくものを合わせたもの。「一字名」とは、明、登、実などのように漢字一字のもの。「数字止め」とは、健一、浩二のように、名前が数字で終るものである。

男子名には、その他下につく字は数多いが煩雑になるので、表には載せなかった、といっている。各区分の下に出ている数字は、その年代に属する人全体に対するパーセンテージで、例えば「郎」の一番はじめの「二八・〇」は一九〇〇—一九〇九年生まれの男子百

(二) 女子名の移り変わり

同じ小学校での調査で、女子名の分類は

(イ)「子」で終わるもの(かなも含む)

(ロ)「え」で終わるもの(「恵、江、枝、重、栄(一字名でさかえと読む場合も含む) など(かなも含む)

(三) 男子名の移り変わり

(一) 男子名の移り変わり
満田氏によれば、東京杉並第一小学校の卒業生と在校生の名簿から調査した、一九〇〇年(明治三十三年) 生まれの者から一九五四年(昭和二十九年) 生まれの者までを十年間隔に統計をとると第一表のようになる由である。

(ハ)「み」で終わるもの：美、実など（かなも含む）真弓、真澄などのたぐいもいれてある
 (ニ)「よ」で終わるもの：代、世など（かなも含む）
 (ホ) その他のうち二音節のもの：石のどれにもはいらないもので、はな、はる、マリのよ

うに二音節に発音されるもの
 (ハ) 同三音節のもの：みどり、みゆき、よしののように三音節に発音されるものとなる。
 このうち、(ニ)と(ハ)とは常に低水準横ばいなので、第二表では(ハ)回(ハ)だけを載せてある。

生	年	子	え	み	二音節
一九〇〇	〇九	七・三	五・〇	〇・五	八四・一
二〇	一八	四・六	九・四	二・一	三六・三
三〇	二九	五・〇	七・九	一・五	九・六
四〇	三九	八・〇	六・一	一・六	二・五
五〇	四九	七・一	八・五	五・〇	一・八
五〇	五九	七・八	五・八	九・七	四・三

表に見る如く一九〇〇年から十年間ほどは二音節の天下であったのが、その後これが斜陽化して行った。がごく最近はまだ少し上っている。これはマリ、ユリなどのような全く異質の名前がふえていくせいであるという。

二音節と全く対照的なのが「子」で、一九〇九年まではごく少なかったが、その後急にふえて二音節名にとって代わり（二音節名の下に子をつけた感じ）一九三〇年—三十九年には八五%にも達した。しかしそれ以後やや減りぎみである。

みのグループはふえる一方で、大半が美の字である。えは若干ふえて来たようでもあるが、まだ一定の傾向は云えないようである

と。

三

私は川柳の雅号について同じような統計をとってみようという調査を

酒 清



灘・魚崎

大塚合名会社醸

はじめた。雅号が多く記載されて

あるのは句集であるから、手許にあった近藤船坊編「川柳女性一万句」（磯部甲陽堂、昭和三年刊）、吉田機司編「現代川柳」（緑地社、昭和三十年刊）（これには五千句載っている由である）の全句、ならびに昭和三十六年の「川柳雑誌」から手当り次第に雅号を集めて四百五十人を統計してみた。一万句といひ、五千句といひても、よく調べてみると同一人の句が記載されているので、正味何人の句があるかと一句一句作者を調べてみると「一万句」の方は一五四八人、「現代川柳」の方は

第三表

川柳女性一万句	現代川柳	川柳雑誌	郎呂	子	坊	人	止数	め字	はじめ	王	お緒
(一五四八)	(二九八八)	(四九八)	湯老露	(九〇)	(七・三)	(一〇五)	(二・三)	(五・九)	(八・二)	(三・五)	(三・五)
(二九八八)	(二九八八)	(四九八)		(八・一)	(六・四)	(二・四)	(二・五)	(六・八)	(五・七)	(五・八)	(五・八)
(四九八)	(二九八八)	(四九八)		(六・七)	(六・七)	(二・六)	(二・九)	(三・〇)	(三・〇)	(三・〇)	(三・〇)

表の中の数字は実人数を現わし括弧内はその全人数に対するパーセンテージである。

川柳の雅号の場合には、漢字の音を当てているので（表音性を利用）「郎」でも三太郎、雀郎、路郎などのほかに、朗（詩朗、産詩朗など）、呂（枝呂、真呂呂など）路（一路）、楼（山雨楼、春秋楼など）、廊（石廊、詩廊など）浪（錦浪、芳浪など）、老

一五六〇人であった。（「一万句」の方が実人数は少ないことが分つて実は驚いた。句会で柳話をした折には急いで調査をしたので、手とり早いと思つて「五千句」の方を先ず調べ、「一万句」の方は時間的に調査が間に合わなかったのので、「五千句」のおよそ二倍の実人数と見なして統計を発表したのであったが、今度ゆつくり「一万句」の方を調査してみても、却つて実人数の少ないことを発見したのであった。）

調査の結果は第三表に示す通りである。

「坊」は剣花坊あたりから尾を引いているように思われるが、「一万句」の編者が船坊であり、その他劍珍坊、突支坊、扇啄坊、土筆坊、梅慎坊などなど、前述の狂句臭の強い雅号が多かったが、その他溪花坊、八翠坊、光林坊など真面目なものも多かった。

「人」は塊人、北人、文人、劍人など漢字一字の下に人がついたものは真面目であるが、京美人、黙念人など狂句的なものもあった。「数字止め」は、一から十まで各数字で終るものがあつたが、そのほか百（当百）、千（弁天千）などもあつた。川柳ではそのほか雅号のはじめに数字が来ているのがあり、「数字止め」よりも多いくらいであつたので、一項を設けてみた。これも数字の一から十まではもちろん（一柳、二山、三笑、四洋、五葉、六葉、七賢人、八七木、九年、十葉、百（百雷）、千（千竜斎）万（万川、万葉など）まであり、これら全部を統計し

読ませる雅号も多くなっている。（あや子、きさ子など。）また漢字一字に子をつけて、女性らしい号も多かった。（良子徳子など）また女性が男性か号だけでは分らないものもあった。（鬼子、遊子など。）統計にはこれら全部を含めたが、最近の子の増加は、女性の進出が多いからではないかと思われる。

た。

「お」は雄、夫、男（かなも含む）以外に、雅号では緒（緒緒、比佐緒など）王（花王、夜叉王など）尾（晴尾）於（久仁於）なども使ったものも含み、なお伊棟、井竿などもあったので、これも計算に入れた。

なお、表には取り上げなかったが、川柳には○丸、太郎丸の後を引いた（と思われる）「丸」のつくのがかなり目立つたが「一万句」の方に三十人（一・九％）

「五千句」の方に十六人（一％）あり「川雑」では九里丸一人で、これは斜陽族であった。また迷亭浮世亭など「亭」のつく雅号も川柳らしいが、「一万句」の方が五人（〇・三％）、「五千句」の方が十五人（一％）、「川雑」では一亭一人であった。

最後に、「柳」という字がはじめ終わりを問わず雅号の中にはいつているもの（柳葉、柳石、燕柳昇柳水、柳安子など）は、川柳の雅号としては特徴があると思われるが、「一万句」の中には五十人（三・三％）、「五千句」の中には二十三人（一・四％）、「川雑」には僅か四人（〇・九％）で「柳」も斜陽族の感じである。

四

さて、第一、二表と第三表とを見比べてみるのに、これらは同じ

レベルで比較することはできない。

第一、二表はそれぞれの年のはっきりしたデータなのだが、第三表は昭和三年なり三十年なりあるいは三十六年なりの一断面を示すに過ぎないものであるからである。昭和三年の表にはいつている雅号が、三十年にも三十六年にもいつているというように重なっている場合もあるし、また同じ雅号なので一人に数えた人が、実は二人、三人と同名異人であった、という場合もあるかも知れない。

話は違いますが、先年ふあうすと川柳社が大会を開いた際、参会者の年令を調べて平均を取った所、確か四十三才ぐらいだった、と又聞きに聞いたことがある。その後数年たっているから、現在では平均年令は四十五、六才になっているであろう。これをもって川柳人口一般の平均年令だとは云えまいが、川柳人の平均年令が相当高令であることは事実で、これは川柳指導者の心配の種でもある。そしてそれら相当高令の川柳人の柳歴が新旧さまざまである。

私の調査した句集や「川雑」に名を連ねた人の生まれ年はあるいは一九〇〇年、あるいは一九二〇年、三〇年と色々の年令の人がある筈である。そしてそれらの人が川柳をはじめた時の年令も人によって違っているのである。本名命名の時が、雅号をつけた時と時間的に

かなり差があると云えるだろう。

年代により命名に一種の流行があると認められるならば（第一、二表）その人が雅号をつけた年代にも雅号に一種の流行があつてよいわけで、本名と雅号の間にも何らかの関連がありとするならば、それらの関係のまざり合ったものが、第三表に現われていると云えるであろう。従つて第一、二表と第三表とが必ずしも一見同じ傾向を示す必要はあるまい。比較しやすい「郎」や「数字名」をとつてみても、事実、傾向は似ているとは云えない。

また第三表だけを見ても、句集の方は関東から発行されているので、関東の作家が多く取られており、柳詠「川雑」の方は関西から発行されているために関西の作家が多くとられておると見て、雅号に多少の傾向の違いがあるように、それと比較して、川柳一般の傾向だと決断することにも無理があるように思われる。

それにしても、川柳の雅号も、一般の名前と同じく、年代によりかなり流行的なものがあるようにであるが、多く見てみると比較的狭い枠の中にはいつてしまうようである、特別珍奇なものは次第に減つて来ている。岸本水府氏は、雅号はなるべく本名を使う方がよい。とその著「川柳読本」に書いておられるが、その説に従ったわけ

もあるまいが、次第にその傾向になりつつあるようである。ただ三郎を佐武郎とか茶撫郎と書いたりして、本名を他の漢字でもじつたようなものが、特例と云えば云えるであろう。しかし使った漢字には一文字ずつ意味があるので（漢字の表意性）同じ三郎でも佐武郎と茶撫郎とは、目で見た時の感じが違うことは確かである。

とまれ、これからの雅号としては、本名には限らないが、あくまでも真面目な、句会で呼名をして恥かしくない、また歌壇や俳壇の人人に眉をしかめさせないような雅号をつけるべきであろう。繰り返して云うが、雅号は自分が勝手に好きなものをつけて少しも差し支えないのである。

（本社会員における雅号の登録に多少の加筆をともなふ。）

續

川柳書架

(16)

川柳江戸貨幣文化

(阿達義雄著)

★本書の巻頭には「佐渡金山絵巻」が掲載されている。

★本書は「俳風柳多留」の経済的・文化的研究の基礎づけとして、川柳貨幣句の検討を主目とされたもので、江戸経済・江戸文化

の研究者にとっては必読の書だ。★本書に引用された句は主として柳多留であるが、その他「万句抄」「武玉川」「川傍柳」等から採録されている。

★次に目次概要を掲げておく。

第一、金貨編——佐渡の金掘と陸奥の砂金、江戸金座銀座の川柳、甲州金と川柳、川柳千両箱、川柳に現れた金貨幣の意匠、大判と川柳、川柳に於ける小判（上）、川柳に於ける小判（下）、通貨でない小判、一分金・一角・小粒・二分金、五兩判・銅豚、百両包・山吹・黄金、「俳風柳多留」に反映したる老朱金の新辨

第二、銀貨篇——江戸川柳に詠まれたる玉銀と丁銀、江戸文化に反映したる南鐐式朱銀、文政老朱銀・天保一分銀

第三、銭貨編——開元通宝と一文の起元、和銅開宝、古銭、川柳水菜銭、川柳新銭座、川柳寛永通宝と寛永寺、川柳大仏銭、川柳十文銭（寛永通宝）と寛永山、耳白銭、川柳波銭（四文銭）、川柳角銭（仙台通宝）川柳天保通宝、絵銭・変り銭、川柳鳥目、種銭、なめ・かた、雁首銭

第四、補遺編——狂句に詠まれたる金銀比価、省百銭論と川柳省百銭、川柳御宝蔵句と千枚吹分銅、江戸時代銭相場推移、柳多留刊行年表

★この外に挿図の目次があるが略する。

★昭和二十二年二月二十五日発行B判6号版二七三頁、定価二十五円、発行所東京都芝区西久保桜川町一九（桜川ビル）東洋館
★著者は新潟学芸大学教授で古川柳研究家の第一人者。

の生まれの町浜 人柳三

——三太郎・紅太郎・杜若——



亭迷越塚

・放
辞
余
録・

明治三十四年三月に東京市日本橋浜町小学校の尋常科(その頃は四年だった)を卒業した生徒の中から後に東京の川柳界にさるものありと知られた川柳家が三人出た。曰く川上幾次郎、寺井鉄郎、八十島松太郎の三人である。これが後年の川上三太郎、寺井紅太郎、八十島杜若……はじめ松寿、可喜津、後に勇魚(いさな)となる……の脱白時代で、お互いが、「幾ンベ」であり「松こう」であり「鉄ちゃん」であったことは、その頃の下町のがきどものよび方だったのだから、もしこれが三人の中に「おおやさん」とか「地主さん」の子が居たら、おのずから違ってくるに違いない。何にもせよこの連中の生まれて育ったところは日本橋浜町という、名うての下

町なのである。然も三太郎は煙管(きせ)打ちの職人の伴だし、杜若は木工の伴である。紅太郎は……私は彼からきき損なったから、三太郎にきいて貰いたい……おそろく似たりよったりではなからうか。この三人……だけではないが……水天宮の五の日の縁日や、清正公さまの縁日をうちよろしかり、人形町の大観音の地内、明治座、真砂座などへも潜りこんだことだらう。浜町河岸の夏は水練場(すいれんば)がずらりと軒をつらねたものだったから、幾んべも松こうも鉄ちゃんも通ったことと思うが、彼等の泳いだのを見たことがないから、あるいは私の空想に過ぎないかも知れない。

このがきども後年川柳家になるだけに、高等科へ進んだ頃には……その頃高等二年を出なければ中学へは入れなかった……芝居(しば)や寄席(よせ)を好み、講談本(立川文庫などはまだなかった)などで豪傑や、俠客などにうつつをぬかしたに違いないことは、私の例からも推察できる。荒木又右エ門、後藤又兵衛、岩見重太郎、宮本武蔵、笹野権三等から花川戸助六、幡随院長兵衛、国定忠治、清水次郎長に至る道程を経て、帝国文庫に移り西鶴、春水、種彦、一九それから浪六、鏡花に移る頃には図書館で柳多留に親しむことになるが、その頃には東京

中の縁日の日取りをそらんじていたであらう。

三太郎、紅太郎、杜若が同窓交驪(文芸春秋の)に登場するとすれば、三太郎は明治二十四年一月一日、紅太郎は同年同月二十五日の生まれだが、ひとり杜若は前の年の七月七日に生まれているのだから一つあにきということになる。これは早生まれ……三月三十一日まで……と遅生まれ……四月一日以後……の関係なので、三人とも浜町で生まれたことは言うまでもない。三太郎のおとつあんが煙管打ちの職人だったことは前述の通りだが三太郎の語るところによると名人だったようである。つまりすい口をふつと吹けば、雁首の火皿からすいがらがすぽんと飛び出るといふしかけて、下手なのが作った煙管では、このすいがらの抜けがこういかない。ロンスンのパイプが世界的に信用を博しているように、煙管は村田張りといった名声があったように名人の職人には煙管やの、あるいは袋物屋のお店(たな)がついていて煙管を打たせたものだった。

この煙管打ちの名人気質(かたぎ)が三太郎の句作りに血を引いているのか、十四才というから日露戦争のはじまった……それは明治三十七年二月である……年から既に六十年に及んでいる。川柳業を表看板にするまでの苦闘は生易

さしいものではなかったこというまでもない……路網、水府、紋太周魚のプロ級はいずれも同様……が、大倉商業に在学中から川柳を作ったといつても、もっぱら投書に精を出したが、明治末期から大正初期には既に柳樽寺川柳会に属していた。大正川柳が創刊された……大正元年秋……時には同人の席を得ている。この頃の行状と交遊については正木十千棒がきやりに連載している柳壇秘話にまかせよう。そして彼の作品についてあげつらうことは、この稿の目的ではないので他日にゆずるが。

この三太郎の手引きで川柳に入ったのが寺井鉄郎の紅太郎で、本人の話すところでは、明治四十二年春川上三太郎にすすめられ川柳を知る。大正川柳の同人うさぎ会、これや会の同人たり、後万朝報柳壇の選を担当。昭和三年むさしの川柳会を創立現在に及ぶ。

とあって柳樽寺つまり剣花坊の直門(じきもの)であることは三太郎同様である。剣花坊が王道川柳無産者川柳などを唱える頃には柳樽寺から離れていることはほかの剣花坊門の先輩達と同様である。彼が毎夕新聞の会計係に入社した頃には、三太郎、雉子郎、船ン坊、夢一仏の編集局をはじめ剣珍坊、吉之介、市坊(後の桐の家)苦笑子の営業局関係、阿弥丸、空

壺、千俵、喜代志その他工務局など矢野きん坊（後の錦浪、谷孫六）の息のかかった川柳家が雲の如く集まっていた。震災後には珍茶坊、みだ六（後の十四世川柳）

啞三味、私なども入社したし、大阪支局には波郎、蹄二、幽香等も在社した期間があるし、空壺、波郎等は私の読売へ移った後の読売に定年まで居残った組である。数えてみると故人になったのが多いが、紅太郎もその一人でいまちよ

つとその歿年が思い出せないが、むさしの川柳会が風詩となつてからだから、飴ン坊と前後だと思ふ。私を紅太郎のウラと称したのは三太郎だが、紅太郎が死んだので「俺がオモテだ」と何かの席でいふ気になったのを思い出す。三太郎も紅太郎も一月生まれだから、むかしのひとに云わせると寅のまる年だと言うことになるが……私でも己のまる年だと云われて、それでよきを見たり、うらない者に告げたこともある……まさか寅どしとはいえない。

ところが八十島杜若が明らかに寅年なのである。前述のように三太郎、紅太郎より半年前の七月七日、つまり七夕に生まれているのだから干支（えと）を繰ると庚寅（かのえとら）となる、九星でみると二黒土星ということになる。この星の相性（あいしょう）をみると一白は凶……三太郎は一白水星

で辛卯（かのとう）である……と出ている。杜若がごとく三太郎に桶をついたゆえんが、ここにあったのかと思われるふしを発見した。

八十島杜若が川柳を知ったのは彼の話したところによると、大正四年村田鯛坊氏に師事し、後氏と共にきやり吟社を創立、川柳くらま会、手草会を興す、現在きやり発行人たり。

とある。村田鯛坊は現在の川柳きやりの主幹村田周魚であつて、村田周魚門下の偉材だったことに間違ひはない。その頃東京薬学校出身の薬剤師……主として下谷、浅草の……が篤友会という親睦会をもつていて、月に一回ウーロ会をしていて、このウーロ会で周魚と酒盞を交わしたのがきっかけで、鯛坊選の薬業の友（薬業界の業界紙）柳壇へ投書したのが川柳への道だった。その頃の鯛坊は薬業の友の編集に在任していた。薬業の友の柳壇から生まれた川柳家は各地に相当散在していた。というのが薬業の友は業界紙の中では最右翼に在る発行部数を持っていた。

明治末期から大正初期の柳壇寺の同人だった鯛坊は放胆な句風を以て地歩を示していたが、花酔の廊吟、錦丸の千束町吟が、柳壇寺の名を……大正川柳の名でもある……を汚がすものとして問題が生じて、紛れたあけく花酔等が同人をやめることとなったのに同情、鯛坊も柳壇寺から退いた。このへんのいきさつは十千棒がきやりへ書いてるので省く。当時の鯛坊は東京柳壇の人氣もので、何処の句会でも選ばするし、合点高点を独占するという華やかな存在でもあった。後に珍茶坊がよく語ったが。

やあ、〇〇君ですか僕は鯛坊です。遊びに来たまえ。

などと声をかけられ、名刺を貰うと嬉しくてぞくぞくしたものだ。これが東京薬学校を出ると警視庁の衛生課で飲食関係の取締まり官を勤めたとは誰も思わないほどの才気はつらつたる態度だったという。篤友会でも八十島がそれに魅せられたのもあろう。清元に注いでいた清熱……延栄津門下だった……より以上の川柳への情熱が燃え、大正九年四月川柳きやり吟社の創立「川柳きやり」の創刊となったのである。創立時の同人水島不老（前名食山人）は篤友会のメンバーの薬剤師であり薬業柳壇の先輩でもある。

私ときやりとの結びつきも、この不老が〇丸、万柳を語らい……みんな啞三味と共に私の川柳以前の友達……創刊号へ名を連ねたのを見て、私のきやり吟社……その頃蔵前南元町に在った……乗りこみとなったのである。そして同人

に参加、夢一仏の参加となり、鯛坊、杜若（その頃は可喜津）との意気投合となり、きやりへの献身……〇丸、万柳、夢一仏も同様……となったのである。

杜若という名は震災後、久良伎から名付けて貰ったものだが、当時の久良伎の意気に感じて杜若は久良伎社同人となり、きやりへの情熱を割いたものだった。その情熱の穴を埋めるべく復活号から15冊の川柳きやりの発行を私の手でやつてのけ、新聞記者に転身をきつかけに川柳きやり吟社は四谷の西念寺（住職は〇丸へ移し、後に小島町を経て現在の鵜山へ変ったままとなっている。杜若が勇魚に改めたのは戦前だが、私の同誌編集の最後となった十五周年記念号（昭和九年五月号）には遠波勇魚の名で東都柳壇への叱言を並べている。これは標題は放浪漫語といふ毎号続いている中で錦先が三太郎に向けられたことは、再三に及んでいたが、その頃私達に三太郎、紅太郎と杜若がクラスメートであることが知れ渡った訳だが、三、紅のふたりが師周魚と同門であり、同時代の川柳家であることに、杜若のコンプレックスが感じられもするが、三太郎にもまた遠波樓の槍玉にあげられなければならぬものがあつたことも事実である。

そこへもって来て相性が凶と来て

乾杯！

気分よく
お酒を楽
しむため
お酒に弱
い方も
強い方も
リポコルを
お忘れなく
愚酔・二日酔を防ぎ
肝臓障害を防ぎます
●強肝と若さと薬業に

リポコル

瘦弱・体力増強・ニコチン中毒

試田薬品



では、夫婦だったらたごとは済まなかったらうし、一所に川柳会……吟社でも……を興し、柳誌を刊行していたら、とても水統は

りにこの三人の句を「初篇 昭和
川柳百人一句」から再録してみ
るが、紅、杜の両者は故人なので近
作は得られないので、恨みっこ
ないように昭和九年版から句を選
んだことを三太郎も文句は言うま
いと勝手にきめておこう。

川上三太郎

天皇旗九千万のほんのくぼ
子供は風の子天の子地の子
海の幸一ツの貝に一ツの名
凡人に今日の陽当り有難し
キリストを生んで背中へ輪が
出来る

十二月某日猫の歩くを見
葱の香のそれも真冬のころ
ぞや

剃刀を慌てて落ちた研ぎ
秋風の中を貫く陽の行方
忙しさに胃を叩いて食ふ豆腐
友だちのうしろ姿の有難味

寺井紅太郎

色街の梅雨とりどりの傘の色
ピンセット置く静けさもやむ
虫歯
血の通ふテープもあらう飛ぶ

かもめ

近く秋をここにまとめる竹箒
水と闘ふ雪の根に負け

湯がねを出れば元の貧乏

灯を消して寝られぬままの過
去未来

イン

チキ世の落伍者

黙々と遺骨を送る駅の雨

世にうとく鳴子の音を聞く一
句

釣革に今日を終わった弁当箱

八十島杜若（勇魚）

綻びを行く先口の手にかかり
そら豆の色も哀れや煮て食は
れ

二上りへくるとつくづく茄子
の毒

足袋の穴世の成行に任せきり

菜を洗ふ手は水鳥の足の色

五色揚げ亭主たる粉名をとき

竹本でとれば忠信きつくなり

ならひ風無分別なる腹の虫

除夜の鐘今年は耳を貸す身分

そろばんも廃して嬉しい松の
内

内

（以上いずれも旧版名原文の
まじり）

み
ち



戸田古方

湯谷温泉は三河もずつと奥へ入
った豊川に沿ったところにある
した。温泉といっても鉱泉のわか
し湯なのですが、遊び場のすくな
いこのあたりではけっこう賑わっ
ていて、チャチなネオンの一
つもついています。温泉場全体が
湯谷駅の構内といっていいひろさ
なので、飯田線を上り下りする国
電の発着の音がおそくまで聞こえ
ていました。

魅力的な板敷川になっている流
れは部屋の内側側ですが、夕刻バ
スをおりた川向いには観光ホテル
の予定地があつたり、流れの渚に
はキャンプをたのしむ若い人々の
姿を見うけました。ここをベース

にして、鳳来寺山へのぼり、佐久
間ダムでもみようというのでし
ょう。われわれがわざわざ東海道か
らこの山の中へ入って来たのもお
おかたそんなあてがあつてのこと
なんです。

数年前、天竜下りに誘われて、
車中ながらこのあたりを通りまし
て、岩肌のおざやかなきめをすき
通して、ゆれうごく、まるでうす
絹としか見えないこの板敷川のチ
ャブチャブは一べんしてみたく
たのでした。又、そのときも鳳来
寺山で泊つてみたかったのでした
が、宿坊が満員でことわられたの
で、登ることをあきらめたのでし
た。

鳳来寺山にのぼるというのは音
に名高い霊鳥「仏法僧」のなき声
がききたいからなんです。その声
は夜でないときと駄目だというし、こ
んどの登山も午前中というので
が、二度もすっぱぬかすのは何だ
か悪いような気がしたので、これ
も名物の千八百からある石段を登
らなくともすむという宿の人の話
に引かれました。湯谷から直行す
ると約四キロで、文字通り朝めし
前に行けるといふものですから、
ついこのり気になってしまいました
た。

バス一台にのって来た五十人あ
まりのうち、おおかたは千八百段
のぼる表口へいってしまいまし

た。湯谷から本長篠へ出て、私鉄
にのりかえて、その石段下へ続く
コースをとったので、まっすぐ湯
谷から行こうというのは私をふく
めて十人ほどでした。

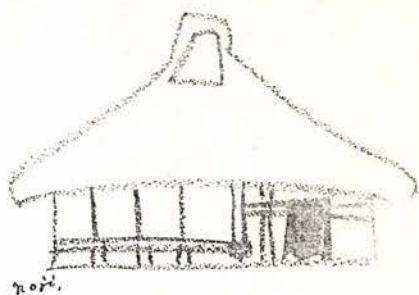
湯谷駅のところから線路沿いに
少し戻ると右側に小さな水車があ
り、そこが角になっていて、鳳来
寺山への道標が立っていました。
はつきり四キロとかいてありまし
た。

みちは室外平坦で、こんな調子
ならと甘い考えにもなり兼ねませ
ん。

前にすつくと峯々が立ちほだか
つていまして、その峯の一つ、頂
に近いところにお寺らしい家並み
がみえるじゃありませんか。あす
こまでのぼるとなると大へん
です。

はじめはきれいな川副いの道で
した。道を教えてくれた宿の女中
さんは沢にそって行きなさいとい
っていました、沢ってこんなも
のかなどという気がしました。とこ
ろが間もなく、本ものの沢です。
石ころのころころしたつみ重なり
の上を歩かねばなりません。でし
た。水は道のまん中を遠慮なく流
れすぎてさえるのです。

一休みします。四キロのうち、
千メートルも来たかなと口にしま
すと、平坦なところを合せてやっ
と七百位かなといふます。



窓 口 談 義

— 詠進歌盗作問題 —

麻 生 路 郎

ことしの歌会始の入選歌が盗作だと云うので、宮内庁の役人たちや関係者たちをあわてさせているという新聞記事を見て、少しく私見を述べることにした。

★卒直に云えば、遅かれ早かれ、起きることが起きたに過ぎないという感じである。今までも、そういう盗作はあったかもしれないが、気づかなかったか、気づいても、騒がなかったものであろう。

★近ごろでは詠進者のレベルが低下したことを物語っているような気がする。従来の詠進者は永年、歌に精進して来た人たちが、謙虚な気持ちで詠進していたらしいが、最近では、あわよくば組や、今回の入選作者のように、文芸通信で題を知って投ずるような娯楽

組や賞金目当や、名誉欲をねらう連中が殖えているのではなからうかと思われる。

★ところが、宮内庁のお役人や関係者たちは、そうした時代の推移には気づかず、歌会始の詠進歌を一つの行事として行い、その方に力が這入りすぎ、歌の本質に重きを置いての慎重さが欠けていたのではないかと思われる。

★次に選者の問題がある。詠進歌に盗作が投じられても防ぎようのないことは一応はうなずけるが、全然責任がないわけではないと思う。選者は歌の良否が判定出来れば能事終りでは選歌機械に過ぎないことになる。一々作家を疑う訳にはいかぬが、作品や、筆蹟其他から多少の勘を働かせることは

出来ないものだろうか。古本屋が素人から古本を買うのに、本人自身の本か、盗んだ本であるのかを色別するようなカンを多少とも持ち合わせる必要があると思うがどんなものであろう。お上品な選者や特別なコネによる選者も結構ではあるが、選者依頼にも省察を加える必要があるのではなからうかと思われる。

★今回のように、その作品が既に発表されている他人の歌である場合、たとえ盗作でなくとも、選者としても、宮内庁の係としても、取消の処置を取るのとは当然である。入選者にしても、同じ作品が既に発表されていることを知った場合、逸早く取消しを申出るのが歌詠みとしての良心的態度でなけ

第二回目に休んだころには私はもうおくれ勝ちになって、まし

た。それ程、坂は急になって、いきました。やっとたどりつきますと、一人が何か小さな木を引っっこぬいていました。よほど珍らしいものらしいのですが、植物のことはさっぱり知りませんので、ただ見ていただけです。これから、さけて行くというのですが、すすめる人もあって、かえりまでここにのこすことにしました。目じるしになるようにと、その岩へ立って出発です。足弱で、太つちよの私は「どうぞお先に」と、みんなの出たあとで、自分のペースで歩き出します。

歩くのに精いっぱい、ものを考えるひまなどありません。しかし歩きながら思うともなく浮んだのは中学生の頃のことでした。ペースのことです。私の通っていた中学校は大阪府堺市の東郊にあり、すぐ南に世界一の広さをはこる仁徳天皇の大仙陵がありまし

た。学校を出てこの御陵をひとまわりして来ますと五千米あるのです。中学一年生に入っただけの時から、旧制の五年生で卒業するまで毎週かかさず、このコースを走られました。小学校にいる間からずっと虚弱児であった私には走る能力なんか全くなかったといってよく、いつの運動会でもビリばかりでした。中学一年生の私は実に正直で、先生が何があんでも走りつづけねばいけないといわれると、速さなんか考えないで、始めから仕舞まで五千米、ずっと動作だけは走っていました。途中で歩いてしまつたり、途中で近みちをする友達を尻目に走ることも自身をむしろはこっているようでした。

ところが、半期一年とたつうちにビリにビリが出来て来ました。三年生のころにはトップから数えた方が早いようになり、やがて、クラスや学年の選手に出されたりしたものでした。からだもぐんぐんよくなり、一人前以上の目方もついて来ました。

追い抜こうとか、勝つてやろうなどという量見なんかまるでなかったのですが、自然にそんな風になつていたのでした。

この時、私は自分のペースというものを見つけたのでしよう。それが私の人生観となり、ゴイング・マイ・ウエイ、私のみちが形作られていったのでした。

この山は火山系とかで、のぼるにしたがって、ますます石はごろごろしています。もうみちに沿った流れも沢もどこかへいつてしまっています。

あの沢の水というのは、どこから集って来た山の水なんでしょ

ればならぬ。今回のように、新聞記者との一問一答で、シドロモドロの作家では問題にならぬ。歌はその人の心でなければならぬ筈だ。朝日、毎日などの新聞紙上から推断しただけでも、今回の入選者が真の歌詠みでないことが判かる。こういう人は歌を詠むよりパチンコでもしている方が安全で、人に迷惑をかける程度も少ないのではなからうか。花盗人や歌盗人を風流として見通がす時代はもう去っている。

川柳剽窃の場合

★今回の歌会始の盗作事件は、詠進句をしない川柳の世界でも、対岸の火事視することは出来ない。三十一音字型の短歌よりも十七音字型の川柳にとっては、たとえ剽窃句でないにしても、暗合又は類似という厄介な問題が起きる可能性が多い。

★私のように年中新聞柳壇、雑誌柳壇の選や川柳専門誌の選や、句会の選、戦城の川柳選などをやっていると、同一作家の他の句から表現形体や内容の扱い方などから、剽窃の句などは案外ラクに発見出来るものである。甚だしいのは私の選に、私の句や老婆の句などを投じて来るのがある。こんな

のは笑って捨ててしまおう。古句を平気で投じて来るものもあるが、そうした剽窃句は専門柳誌の方には稀れで、多くは新聞や雑誌の柳壇である。活字になる喜びと云っても、他人の句でははじまらぬ訳である。たいていは賞品目当てなのが多い。バレても制裁がないので、多くの変名を使い、妻君の名まで使って、しつこく投句して来るが、そんな手にはコナラが乗らないので、いつのほどにか姿を消すものだ。

昔と云っても、もう三十幾年になると思う。講談社で発行していた「現代」が川柳を募集していた。選者は坂井久良伎だったが、その一等当選が私の句だった。何処の誰れだか知らぬが、私の句を剽窃して、百円をせしめた。その頃百円あれば東京から伊勢詣り位出来たものだ。

私は他の人から知らされて判ったが、面倒くさいので抗議は申し込まなかった。そんな訳で、今では盗んだ作家の名も、盗まれた句も忘れてしまっている。そんな時には、せめて講談社までも知らずのがホントだろうと思うが、つい面倒臭いので、そのままにしまった。誰かが講談社へは知らして、講談社では賞金は送らな

ったかも知れない。年中、そんなことの発見係のような投句家もいるものだ。その頃、私は同じ社の「講談倶楽部」の柳壇の選者だった。それを知ってか知らずか、私の句を盗むなんて随分ムチャな人間もいるものだ。

★剽窃句は前述のように、案外ラクに判るものだが、川柳は何分十七音字という短い詩型であるから絶対に暗合がないとは云えない。しかし、暗合句はたいては秀れた句でない場合が多いので、両方とも没にすることにしている。類句の方だと、一字位の違いでも、表現のよさがあつたり、又内容が少し違つて来たりするので、どちらを捨てるか、どちらを生かすかが、ハッキリ判かるので、その点は暗合よりも始末がいい。

★暗合と類句については拙著の「川柳とは何か」の一四二頁にかなり詳細に書いておいたから、参考にして読んでもらいたい。

★とにかく詠進歌の盗作問題に近ごろの人騒がせだった。娯楽本位の人たちの盗用や、虚栄心の出来心の盗用ぐらい非人格的行為はない。私たち専門柳誌に廻る作家の作品は何処までも良心的な作品なのであるから、変な方面に利用されないことがのぞましい。

う。流れの方向や、早さをきめるのは自然のかたちや、坂のきつき弱さだけです。そして、いつの間にか巾をもち、水のかさをふやして、この山ののぼり口でみつけたような水車をはたらかせるほどにまでなっていくのです。

逆らわずにいくという気楽さ、何やら、大へん楽な気持ちになつて来るのでした。

行く手に茶店のような屋根が見えます。やれ嬉しやと近づいてみると音が閉つていて、人の気配もありません。そしてそこで道が大きく右へ曲り、バツと景色が開けます。

左側はふもとの豊川の流れている谷までさきえるものもありません。みちは相変らずのぼりで、ふうふういっています。見通しの限りには道連たちの姿は見えませんが。

私はその眺めの中程まで来て、思わず立ちどまって、うっとりしました。

どの山の頂もここよりは低く、豊川の流れこそはつきりしませんが、それをかこむ細らしいものも見えていました。本長篠のあたりでしょうか、それとも湯谷がみえていのかもしれませんが、話相手もなく、ひとりですうきめて

いるだけです。空いちめんに雲がひろがってしましました。

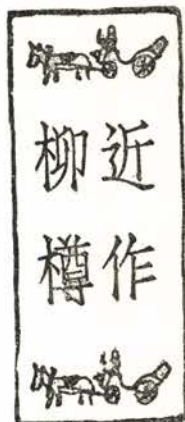
長篠といえは信玄なきあとの武田勝頼と徳川家康、織田信長の連合軍が戦ったところです。そしてこの谷間には長篠城がありました。あの鳥居強右エ門の長篠です。徳川方のこの城は武田軍に十重、二十重にとりかこまれ、その急をつけるべく、城をぬけ出したのが強右エ門でした。無事、家康の居城岡崎へたどりつき、使命をはたしての帰りみち捕われてしまいました。そして長篠城の城門の真下までつれてこられて、降服の勧告を敵方に命ぜられました。ところが、強右エ門は織田の大軍を交えた援軍が間近にせまってくる、あくまでがんばれと全く反対のことを叫んで、壮烈な最後をとげたのです。

又、そのすぐあとで戦われた長篠合戦では武田方の一騎当千のものふたりが足軽のうつ鉄砲にさんざんにやられ潰滅してしまいました。これは歴史の流れに生じた一つの節であり、近世史の曲り角となった大切な出来事です。

川柳雑誌社特製

投句用 柳 箋

一冊(五〇枚綴)三〇円
送料(一冊分)二〇円



麻生路郎選
北川春巢選

うつぶんの酒垂直に胃に落し 福岡市 田口 麦彦

貧者の一灯ばかりあつめて募金 同

金の世のならい鈍行待たされる 同

ステレオの新居を夢に満はたち 同

女優結婚その後の芸を監視され 同

素通りの市場はやけにかなりたて 神戸市 波多野美幸

作文に五女若い母欲しと書き 同

五枚目からは千円札だったボーナス 同

生活はきびしいものと花を生け 同

痛で死ねばあきらめの早いこと 兵庫県 河原みのる

一尾の金魚の冬をもて余し 同

透明になりたいような十二月 同

席あけてもろて嬉しくも淋しくも

けとばした石が乞食の前へ飛び 高知市

電話してみれば手紙は着いていず

おしゃべりのあいまに女あくびす

赤旗がだらりと立ったままつぶれ

その笑顔鼻のひくさをカバーする 竹原市

わる口をきいてた様な礼を云い

招待のサテ席順に気をつかい

達筆なだけに楽書腹がたち

ボーナスがたんまり入るのは隣家 鳥取市

十二月まがりなりにもこぎつける

十二月鶏もかすれた声で啼き

下がったら下がったで株お買い時 大阪市

自家用と書いて糞尿運搬車

アンテナの賑いにけりガード下

見えすいた世辞さりげ聞き流し 貝塚市

十二月加速度ついたようにすぎ

女患の化粧へ鼻をくすぐられ

同

須藤 俊江

同

同

同

杉原 愛鳩

同

同

同

近藤 昭夫

同

同

板倉天悟空

同

同

千石 快人

同

同



句会と川柳基本
法について

直原七面山

さて次に私は川柳基本法について一言ふれてみたいと思うのであります。

考えてみますと、現在川柳作家と称せらるる人々の大部分の者は、恐らく川柳の現状について満足はしておらないでありましよう。

否、満足どころか、彼らは抱え切れぬ程沢山不平と不満を皆んな持っているに違ひありません。その証拠には、彼らは、"いまの中に川柳をなんとかしなければ大変だ"と、ばかり、夜を日についで一生懸命、ああもしこうも試みてあせりにあせておるのであります。

このことは皆さん御自身、胸に手を当てて考えてみて頂ければ、"なる程そういえば僕も私も"と充分了解して頂けることと思います。

また、いろいろな句報や柳誌の上で、常に詩性川柳が論ぜられ、新川柳理論の確立が叫ばれ、川柳のありかたについて、いろいろの



子の出来がようて貧乏忘れさせ 竹原市

山内 静水

晩酌で満足してるほどに減り 須崎市

高橋 蟬蛇

子のいゝ夫婦よばよばの犬を連れ

同

酔えば寝る夫の癖をうれしがり

同

信念をよってたかつて押えつけ

同

貧農の愉快指数は株下落 青森県

木村 涼人

満ちたりた顔でバタヤの夫婦押す 京都府

大久保 和二郎

豊作を祝し商人如才なし

同

定年が近くオーバーの派手を着る

同

元地主雨の漏る倉持てあまし 兵庫県

斎藤たけお

メガトンの空気すかして初日出

同

思い出に苦しみながら長生し

同

さくだけの数の子の値をきいて 鳥取県

鈴木村 譲子

来年のカレンダー早やプランたて 芦屋市

三上 笑路

世間ほど極道を親気にしてず

同

嫁きおくれ樟腦代が高くつき

同

浄財と押しただいて持ってゆき

同

人生のスタート逆子で生まれて来 見島市

伊丹柳 瓢子

銭のこと云うこの恋はもう下火 香川県

三井 酔夢

ボスターは冬を知らない湯の煙

同

御亭主の顔が見たいと女中酌ぎ

同

大売出しげに閑人の多い事 高知県

山川 勝子

二次会の相談堂の光から

同

曲つても杖をついても孫を連れ

同

遅配はするわポストでは焼かれ 日南市

杉本 一鶴

前身は華族の触れでサギに会い 大坂市

万代 句念坊

手術後は意気地ない程身をかばい

同

じんべ着て見ざる聞かざる云わさる日

同

安静に限る寒さも知らず済み

同

乗り遅れ久方振りの日向ほこ 岡山市

行吉 照路

禅僧の喝より妻の目が恐い 大坂市

木村 草々

お仕事は切れても女に弱い君

同

箸のあげおろしに物価高をぐち

同

お給仕の小僧七才一休息 芦屋市

里田 一十

清元はあくびドドンバならば 上野市

同

よその娘の嫁きおくれまで案じられ

同

意見や論争が繰り返えされていることをもってしても、これは誠に明らかなところであります。

いわば川柳の大混乱期であります。そこで考え得られることは、こうして大多数の柳人達が、今のうちに今のうちになんとかとあせりにあせっているこの時こそ、私は、川柳百年の大計を樹てるにはぶつつけの時であり、派ばつの多い日本の川柳界の大同団結を計るにはもって来いの時期だと思ふのであります。

即ち川柳基本法制定には絶好のチャンスなのであります。

従つてもしも私達がこの好機を逸つたならば、私は川柳と他の短詩型文学との格差は日を追うて増々増大して行き、遂には收拾のつかぬまでの大混乱が川柳の世界に必ず起きて来るものと思ふのであります。

まこと悔いを千載に残すような結果になり兼ねないのであります。

然らば、現代日本の川柳界を律すべき川柳基本法はなにびとによって制定せらるべきかという問題が起きて来るのであります。それこそ、現代川柳界の第一人者として自他共に許し、柳界の巨星と呼ばれ、恐らくは日本川柳史の一頁に必ずやその不朽の名をとどめられるであろう我が恩師麻生路郎先生こそ、川柳基本法制定の最



セツとした妻の二三日ほめておき 大阪府

西本 保夫

幹事先ず部屋の広さが気にかかり

同

うたがわぬ瞳に冗談があわて出し 今治市

同

孫の無い爺婆風呂で遊んで来 神戸市

吉田 隆史

貧乏がはなれぬ恋で泣き寝入り 鈴鹿市

同

小説の筋未亡人に智恵をつけ

同

おとこだと思う胎教裏切られ 鈴鹿市

吉田 俊和

死亡ゼロの日一日あった嬉しい日 伊丹市

小川 静観堂

アルミ貨の不足を聞いて卵買う

同

一人ぐらい消されても 御時世

同

ほら吹きの話が派手に手もひろげ 大阪市

福井 竜昭

親善の旅へ和服も持って行き 玉野市

小谷 仙山

値切るため妻買物についてくる

同

ポスターで凌ぐ飯場の透間風

同

豊作の一部を暖房器に廻し 出雲市

中川 晃男

出し入れの派手な師走の貯金帳 大阪市

藤富 淀月

焼芋をかじり流行色のこと

同

マジックの楽書怨む貸本屋

同

貧乏に拍車をかける妻勝気 愛媛県

村上 石峰

寄宿舎の読書平凡週刊誌 津市

嶋野ひろし

大学を出て高原に鯨をふり

同

改名のその後の運をまだきかず

同

がりがりになって美人の影うすれ 西宮市

鶴飼 鮎子

靴下の夢はこわせぬプレゼント 京都市

土岐 無極

大売出しの音として聞くジン ダールベル

同

街師走乞食へ無駄な人通り

同

旅先へ宅の電話が先廻り 姫路市

隠岐 不酔

バイブルへ前科五犯は髭を抜き 大阪市

伊集院 良

妻からの電話坊やの声も入れ

同

死の灰が降るとも知らぬ産声よ

同

ストーブは紅く燃ゆれど倦怠期 富田林市

浅川 八郎

口泡をとばして楽に喰う話 羽曳野市

島田 雄峯

あみだくじ廻天焼を慌てさせ 大阪市

永田都詩子

適任者であり、この大仕事を完全に成し遂げ得られる唯一無二の実力あるお方であると私は思うのであります。

日本如何に広しいといえども、先生をおいて果して他にこれを求めることが出来るでありませんか。否、答えは明らかにノーであります。

皆様も御承知のように私は一地方における一家にしかすぎません。

が、しかしながら、私は先生の弟子として、この光輝ある一九六二年の年頭に当り、胸を張り声を大にして先生に対して川柳基本法の制定を強力に要請懇願してはばからないものであります。

もし先生において、このことを御快諾下されるならば、川柳傘下にたむろする全ての川柳人は挙って先生のその御決断を己が決断となし、先生の願望を己が願望としこの世紀の大仕事に参加させて頂き、先生の良き手足となつて、氣迫あふれる御指示のもとに、各自各自が自己の持つ全ての知識と情熱を傾けて、この事業の完遂に自分の寄与をなさなければならぬと思うのであります。

そうあることが、弟子としての当然の義であり、なさねばならぬ自然の道であらうかと思うのであります。

思えばかくあることによつて、初めて私達は身を川柳雑誌社にお



裸でというのに三種の神器来る	大阪府	加川	大然	下ることコロット忘れていた株価	守口市	樋口	一峯
七十になっても高利で貸してはる	和泉市	末田	晃康	詰めかける見舞の友に死期を知り	大阪府	桐山	清風
仲人がいるのに電話またかかり	大阪府	井上	文子	一万円見せびらかして安く買い	松江市	岡崎	雪美
ボーナスのプラスアルファだけ残り	松江市	岡崎	祥月	十二月蘭草の金に未練なし	岡山県	鳥取	周甫
裏の手を知らず情の遠廻し	竹原市	大洲	大八洲	頼りない男へ苦勞する気なり	兵庫県	常岡	孝風
とび乗りは環視の中に息を吐き	羽咋市	三宅	ろ亭	ニコヨンにしても強味のある子持	玉島市	田辺	好女
ご想像にまかす外なき二日酔	金沢市	山本	木象	予報も見星も見ておく小旅行	大阪府	山田	蛙水
御題目声の銷まで有難し	愛媛県	河本	南牛吏	「倍增」のお経に遠くボタの街	福岡県	小田	無限
宴会メモなつかし在職時の手帖	仙台市	平野	光道	本棚にカーテン下ろしテレビ見る	豊中市	稲増	久雄
立売りの切符老婆の方で買い	西宮市	松島	光一	温泉は一泊あとは船と汽車	愛媛県	川又	庸児
初写真皆ありったけの顔で撮れ	七尾市	松高	秀峰	流行を気にせぬ妻で世帯じみ	玉島市	井上	旭峯
サンマ焼く煙座敷へしのび込み	貝塚市	護川	梢月	新築へかっとまばゆい陽が当り	宮崎市	野口	卯之助
剣突くを笑顔でかわす程世慣れ	大阪市	三輪	九文銭	斗病の苦勞が灸の跡に見え	愛媛県	村上	竹生
真面目を買われ倉庫番でいる	西宮市	沖吉	照児	商人の世辞新聞の見出しめき	松山市	沖原	光雄
玉子酒欲しいクシャミのタイミン	笠岡市	谷本	鈍愚坊	父が往き母も続いて悪い年	京都府	島津	栄九
宝生む福の神なる嫁御くる	広島市	白石	笑楽	見晴らしが佳うて参詣後になり	笠岡市	蔵本	白梅子
抱いて見「りなかして見たりして	岡山県	永宗	宗義	大雨のつど俄かブルのガード下	茨木市	高木	繁太郎

味のてーこ

モダン 川柳

心 芥橋大丸北の辻東へ

御 門

TEL 07 6684

御集会には階上御利用下さい



くことの誇りと喜びを身を持って体験することが出来、川柳にこそしむことの嬉しさと生き甲斐を充二分に満喫享受することが出来るのであります。

作家冥利につきるとは正にこのようなことを申すのでありますまいか。

その昔神の子モーゼが天与の十戒を捧持して、迷えるイスラエルの人々に向って、生きる一筋の光明を投げ掛けたように、私は路郎先生こそは、この混沌として極まりない川柳の世界に、否、荒れ果てた川柳の広野に、黄金を持ってふちどられた真理の道を発見せられ、〃もろ人よ迷うことなかれ、道は一筋いざ進みなん〃と、満天下の全川柳人に向って、大号令をお掛け下さるものと深く信じて疑わないものであります。



虎御前

富士野鞍馬

虎御前は、大磯の遊女で、曾我十郎祐成の情人であつたので、浄るり、芝居、物語などに、いろいろに潤色されて伝えられている。

十郎は度々虎の皮をはぎ

(タル四〇)

祐成は時々虎の皮をはぎ

(タル八六)

と川柳に作られている。曾我兄弟は貧乏であつたから、情人虎御前の着物をはいで入質したであらうと、川柳流のウガチである。それを本物の虎の皮になぞらえている。また祐成は虎のなき声きいた人

(タル八〇)

と、情交の濃やかなところまで詠まれている。これも本物の虎の鳴き声に洒落ている。

兄弟は相模女にくらいこみ

(タル三、拾六)

虎ひとり相模女とおもはれず

(タル七二)

また十郎の第五郎は、化粧坂の少将という遊女が情人であつた。

虎坊としこなしでよぶ鶴の丸

(タル二)

「鶴の丸」は朝比奈三郎の紋である。大磯で遊ぶ朝比奈が、虎御前を「虎坊」としたしく呼ぶのであるが、「しこなし」とは様子をつくる態度である。

富士の狩場へ大磯の狐も出

(タル一〇七)

建久四年五月二十八日、富士の裾野で兄弟仇討の時には敵工藤祐経の飯屋へ入り込み便宜を計つたという話もある。それを「大磯の狐」と洒落ている。

兄弟は、敵工藤を討ち取つたが、十郎は、仁田四郎に討たれ、虎御前とは最後のわかれとなつた。それを悲しみこがれる念が石と化したという

俗説が生れ、その石というのが、大磯の町はずれにあつた。

とらかはかもろこし原の近所なり

(タル三二)

虎が石もろこしが原近所なり

(タル一〇一)

とそれが詠まれている。「もろこしが原」は平塚辺一たいの眺めをいったもので、虎は外国に棲む獣であるから、その名に洒落て、「虎が石」を詠んだのである。

孝貞に和漢二つの虎が石

(タル六〇)

と、昔中国、李広の故事と並べても詠まれている。

この虎が石は、豊国の大磯の絵にも描かれ、「名所記」には、

「宿かはら、虎が石とて九き

石あり、好き男あぐればあがり、色好みの石なりと、旅人あざむきかたる。」

とあり、また「好色旅日記」に

「虎御前のあまになりてこもられし庵もここなり。なふ恋しゆかしの念力石となりてあるを、たび人大ぜいあつまり

てあぐるにあがらず、賀州取てあぐれば、ひょうたんよりかろし。みな人手をうって、こなたはさだめて、けいせい買であるべしといふに偽なら

ず。」

とある。それで、美男が持てば軽くあがり、醜男では重くあがらないというおもしろい俗説があつた。十返舎一九も「膝栗毛」に

このさとの虎は敷にも剛のものと、

おもしろ石となりし貞節

と、大磯の条で狂歌を詠んでいる。

少長に持たせて見たい虎が石

(万 宝)

少長は、美男二世中村七三郎の俳号で、よく十郎を演じたので、虎が石は軽くあがるだろうと川柳に作られている。

五月二十八日に降る雨を「虎が涙」といわれていた。

「日次記事」に

「五月二十八日、虎御前忌。

毎年今日雨多、俗謂、今日虎娘、曾我祐成と相別、涙変じて雨となる故、今雨、虎御前涙也。」

とあり、「虎の雨」ともい、これも川柳に詠まれている。

今日の雨建久四年より降り始め

(タル四八)

五百年まだ泣きたらぬ虎が雨

(ケイ初)

牧狩の夜討の雨はいまだ降り

(タル五八)

と川柳になつてゐる。今からだと七百年である。

梶原を窓へ追出す虎が雨

(タル一三三)

梶原は、その紋の形からゲジゲジという仇名があつた。それが出ると雨が降るといわれている。

目黒でも虎が雨のもらひ泣き

(ケイ二二)

五月二十八日は、目黒不動の縁日である。その日雨だつたら参詣者も少ない。

当の五月二十八日は、毎年両国の川開きで賑やかに花火のあがる日であるが、もし雨天だったら順延で、その日はお流れということになる。

虎が雨玉屋鍵屋はもらひ泣き

(タル一〇〇)

虎が雨降って花火も流れなり

(タル一四九)

花火も流れ両国も虎が雨

(タル八四)

と詠まれている。玉屋、鍵屋は花火屋である。

こうして華やかに伝説された虎御前は、伏見大納言の娘で、十郎、五郎の死後、その菩提を弔い、十九才で尼となり、寛元三年(一二四五)正月、紀州熊野で没したといわれている。十郎の死後五十二年であるから七十才ということになる。

前門秘帖



東野大八

春二月といえは、北京の昨今は
アンズの花のまっさかりだ。

この桃季杏花のケンランたるさ
まは、春情のフンイキを絵で現わ
したようなものだ。中南海公園で
は、千田札の裏にあるお堂そくく
りの温室がある。この中にはあり
とあらゆる中国の豪華な花々がケ
ンを研ぎあって、その芳香で息も
つまるばかりだ。

中国特有の花で、夜来香という
のがある。胡美芳がよくナイトク
ラブでうたう春意じょうじょうた
るメロディーで晋山の花の形容に
ふさわしい。この花はきゃしゃな
茎に肉感的な花をつける。その香
りは人の肌で花びらをひらき、そ
してその温みの高さに応じてくん
香を放つ。

亡くなった大阪の大ダンナ小林
一三さんが、北京前門の頭等（日
本の一等）で、美花という美妓を
呼んだが、ひどく御意にならな

ク山田五十鈴をつくりじやのう
とご満悦、滞在中はヒマある毎に
彼女をそば近く招じて離さなかつ
たという。

このニュースを送った毎日新聞
の記者と、後日彼女を検分に出か
けたが、若いわれわれは小林さん
ほどのいろいろを彼女から感じる
ことができなかった。けれども、
その胸にさしていたのが夜来香と
きかされ、小林ダンナもこのくん
香にイカれたのじゃろう、という
ことで若い当方は割り切った。

前門街といえは、満洲川柳の掌
櫃（ジャンクイ）石原青竜刀セン
セイのショバだが、この前門の扇
子屋でもらってきた陶製の桃（モ
モ）の置きものを開けてみせた
ら、ウムをいわさず即座にまきあ
げられてしまった。コッポリ一つ
のモモ形にふせたその円型の中味
は、ハダカの男女一対がいざこれ
からと向き合ってみるからにか

いい象徴をたがいにつめ合って
いる珍物だった。

北京前門の電車通りの店々には
扇子・團扇製造店がよく眼につ
く。店の奥で、扇面を彩っている
職人たちは、変りダネの才物が多
かったようだ。画才、書才に長け
て、みるからに嘆息を発したくな
るような作品を仕上げた。ところが
この職人たちは、小遣い稼ぎ
に、秘面密文をよく描きまくつ
た。

中国人は四千年という大河のご
とき年輪を背負った民族だけに、
せん細巧の彩色図絵を得意とし
た。奉天博物館でみた親子三代の
ししゅうじゅうたんや、金瓶梅の
密画など、何十年の歳月を根気よ
くそこにつぎ込んで仕上げたもの
だときかされた。

もっとも扇子屋の職人の内職
は、そんな手間をかけていたので
は金にならないので、程よく仕事
をすませておくわけだが、習性上
日本人のそこらあたりのズサンな
ものとの比ではない。

わたしは一人のそうした職人と
ついじっこんになり、よくバイカ
ルを引っかけ合ったが、その礼で
もあるまいが、酔いにまかせた挙
句、一帳の秘図を贈りものしてく
れた。絹布の一巻で、つづれ織り
風の表装でみるからに豪華なもの

であった。

携え帰って独り春灯にそれを展
げてみるなりわたしはアッといっ
た。始皇燕声図というので、十二
帖から成っていた。

紅樓夢の秀才みたいな美男子
と、ひさしがみをなよなよとわけ、
そこに花かんざしをさした蒲衣の
裸女の戯れがそこにあった。清潔
にして謙きよ、品よきこと宋朝休
の字幅をみるごとしである。リア
ルとカルカチアのお化けみたいな
例の日本の春本とは天地雲泥の隔
りがある。

十二帖の庄巻は、まん中ごろの
一幅で、全裸の宮女と半裸の貴公
子が相擁しているの図だが、かん
じんのところは青い几帖がさえぎ
ってみえない。

この二両人をめぐるムードが絶
品で、一人の宮人はショウを吹奏
し、また一人は胡弓をとり、また
他のところで一少女は月琴をひい
ている。この三人の楽手のあたり
には桃李がけんらんと咲き競い、
小鳥のカゲさえみえる。

せかず急がず春日遅々のたいと
うたるその風情に、交合のご両人
はもはや仏性に近い。このような
清潔で、神々のような春本をかつ
てその日までわたしは眼にしたこ
とはなかった。（今もって同様
だが……）

悠久なる天地自然の中の男女の
そほくなるこの交合、わたしの眼
の底にいまもこの一幅は、夢のよ
うなベールの底で、美しくけん
らんと匂い、そして葉の音さえも
奏でている。

核兵器や死の灰に、人類悪の極
限をさらけ出している米ソの両巨
頭、独り居の部屋に中夜秘やかに
この秘図一巻を贈れば、少しはど
うにかなりやせんか、そんなこと
を考えたりしているいまのわたし
である。

なおこの前門の秘帖は、森東魚
先生が垂えん久しくされていたが
結局松尾小女郎さんに強奪されて
しまった。しかもその価は金七円
なりのバイカル的一本だった。

秘巻これ巨額に達しわれ酔
えり

なんていういい気のハガキ一枚
が後日舞い込んだが、いま考える
と惜しいことをしたものだ、悔
やむこと無量である。

このハガキのあとで、小女郎さ
んはみまかった。手元にあればも
つと長生きできたかしれないと、
正直なところわたしはまずそうい
って深いタメ息をもらした。

・寒中見舞・

藤井明朗

島根県雲南木次町

評句 リレー



大 阪 市
大 阪 府
岡 山 県
鳥 取 市

市場 没食子
河村 日満
田村 藤波
早川 清生

うなずいて自首する髪を梳いてやり 白 星

日満—人情味豊かな句。といふことは出来るが、私にはどうも親しめない。というのは、作意的なものが強く感じられるからである。しかし句のまとめからも、格調からも、これといって別に非難するところはないようだ。

没食子—やはり一つの愁歌場の句で、髪を梳いてやっている方ももらっている方もの腹の中の痛まじさが想像出来る。上五うなずいてであるが、犯人の場合ならうなずいたと表現するだろうが「て」であるだけに梳いてやっている方に僕は解釈している。この句の場合母と子と見た方が情調的だと思

うし、その他の関係であればその上に人情味も加わる。ともかく流調なまとめ方の手腕をかいいた。藤波—この句は可愛いわが娘が何かの動機で大それた犯罪を敢てし、少しでも罪を軽うにと自首させることに一決しうなだれているところの頭を、母親が慈愛の手で

梳いてやると云う私小説的悲劇の一場面を描いて余すところがない。現代の世相から云うても決して作りごととは思わない読みごたえのする非凡な句、特に推奨したい。

清生—この句には物語がある。川柳家には人情味ゆたかな人が多

いので、このような句にはついほろりとなりがちです。動詞が四つも続くことがこの場合さらに効果を高めています。

この作家はよく句評に採り上げられて、ご本人にすれば迷惑だろうが、それだけ力量もあり、問題作も多いわけです。

句評によく作意が過ぎるということがいわれますが、私自身は人生の真実を衝いた作品なら、片々たる事実より尊いのではないかと、う青くさい意見に賛成なのです。なおこの句、人物の（どちらか一方の）心情が描ければもう少し違った迫力が生まれるのではないでしようか。

日満—句の内容については、各

者の評でつづいているかも知れませんが。だが私は、この句からは特に胸迫るというものを感ぜません。それは句の構成の上手さにあるとみるのです。特に上五の「うなずいて」については、私には「うなずい」という感じが先にたつてしま

って、それこそ「心打つもの」が消えてしまふのです。

没食子—みなさんの意見も母子とみられているので僕も同感。本当に一編の人情小説、否川柳寸劇にもなります。但し日満氏の言われる通り、親しめないと言うより陰うつさのただよっている句で飛びつき難い。句のまとめ方もさすがだし、上五の表現から色々の連想も湧くのでこれも日満氏と同意でうまいと思う。

藤波—私はこれ以上詮索せず額面通り受取っておきます。気の弱

いせいか何んとかなく惹きつけられるものがある。

す。しかし内容の割にもうひとつ迫真力がないのは、情景の描写に終わって句に押さえがないため、緊迫感を欠いたからではないでしょうか。小説が悲劇の一場面を感じるといふご批評も出ましたが、これが通俗小説やお涙芝居にならないことを本気で祈ります。作者ご自身川柳をそんなに安っぽく見

○

無重力状態に似し夫にて

日満—ガガーリン、チトーフの名と共に「無重力」も知らぬ人はもう居ないであろう。

テレビ等で、空中をくるくる廻ったり泳いだりしている有様は、子供でなくとも大人さえ、大きく

魅せられるものがある。しかしこれを現実の中にもって来ると、そんな呑気なことは云っておれない。自主性のない、ふわふわして、しゃぼん玉のような夫を詠むに、時代はうまい言葉を選んでくれた誇張も適当に効くし、余韻もありリズムカルでもある。

没食子—句の内容はとも角として表現に相当の苦勞をしたことが認められる。時代が変ってくるにつれ、川柳の表現もかく変化して

ゆかねばならないかと思えば川柳の表現も時代時代による字句が出て来る。そこに新しい川柳が見付かってゆくのである。表現の上手さによって句が生きてくる。川柳にも修辭の必要のあることがよく判る句だ。内容は昔の結髪のお亭主が落語に出て来る熊公八公の諷刺だ。

藤波—頼りない夫を表現するに適切な比喩、新鮮な発見だと思ふ。無重力の解説や句の構成については日満さん没食子さんらと全く意見の一致をみた。これ以上何おか言わんやである。「似し夫にて」が余情を保っている。作者の技巧を多とする。

清生—昔からのありふれた事柄も、時代時代の新しい感覚によって把握されるか、表現に工夫がこらされたりつばな作品に生まれ変わるが、この句はもちろん後者に属するものでこの種の句に没食子さんの

人網のような男が跳梁しがあり、ひとつの典型として私も初学時代から記憶しています。

ところで、句評はもちろん句の価値を定めるものでなく、多様の見方のひとつを示すものですが、私はどうもこの句に思いつき程度のおもしろさしか感じないので

す。

日満—何にしても新らしさを求めるとしたら、他人に先んじなければなるまい。この句をういう点について、先着であり、作者のは

やい頭の回転を認めたいと思う。
「初日の出見よ東海の空あけて」等も、時代作品ではないが「思いつき程度」との感じなきにしも非ずだが、作品として結構頂けるとおもふ。

没食子—みなさんの言われる通りで、別に言うことはありません。

藤波—主観的には夫の謙虚又は客観的には妻の嘲笑ともとれるがこれ以上の詮索をさけ顔面通り受取っておく。時代作品として、恥しくないことを重ねて主張する。

清生—私も夫婦どちらの立場から詠まれたものか考えていたところでした。どんたくさんは軽快な手法をもって鳴る作家で、自分自身の作風をもっておられるのは立派であり、この句も新しい事象を自分のホームグラウンドでとらえられた点は認めますが、私はこの人の限界はもっと高いと考えているのです。

この句にはみなさんが先着の功というものを認めて、時代作品の作品だと評価しておられ、私も川柳にはそういった面のあることは承知しているのですが、しかし一般的に私たちが政治や社会や経済の新しい情勢や、複雑なあるいは怪奇な機構を、直接それに迫ることなく、平易な身近なものに對する安直な風刺に置きかえて逃げたしまう場合が多すぎることに、私にはある危険を感じるので。

○ 剃刀のような顔して低姿勢

延平

日満—比喩法の句として、剃刀はよく使用されるが、顔に比喩したのはどうだろうか。勿論「剃刀のような顔」とは「冷酷限りなき顔」のようなものを指していることは解るんだが。それに今流行の低姿勢も、もう鼻をつくし、内容も浅いようだし、とすれば批評も一寸酷になったかな。罪は比喩にあまりにも多い「剃刀」にあると云っておきましょう。

没食子—この句から内容を探してみると、低姿勢と言うものに、一点腹黒なところが浮んで来る。剃刀が言葉キレイな比喩表現であれば、コンドルを使って見てもかわない。ただ嫌な感じの比喩であるだけである。剃刀のような人だとか、気性の人と言った場合、警戒は要しても、まだしも好感の持てる事を得とした。けれど顔となると対者は一言半句もおろそかに聞き流せない場合が出てくる、そこへ低姿勢と来ているから尚のことだ。句としては姿の良い句だ。

藤波—普通では想像もつかぬ一見とっぴなようなことを勇敢に詠まれている。もしそれにこのような人間があったらいわゆる二重人格者でしょう。肺腑を刳り鋭い言い廻しでどうも後味のないのが難点ともいえる。推敲の余地あり、句論佳句の圈内には入りますま

い。

清生—前句に引き続いて比喩の句ですが、比喩はありふれた表現ではあらわし得ない事物の新鮮な本質的な姿を創造するもので、それだけに言い慣らされた比喩は、とくに直喩の場合まったく新しい価値を創り出さないので。また川柳家に深い思想が必要なのは言うまでもないところですが、思想だけでは川柳にならないので、その形象化が正鵠を得なければ句も弱いわけです。もちろんこんなことは作者も先刻ご承知で、この句が句評に採り上げられるのは不本意なことでしょうが。

日満—何回読んでみても、私にはこれ以上云う言葉はないようです。作者として弁解というより、云いたいことが多々あるだろうが、作者が意図している対比の点は充分承知の上だから止むを得ない。

没食子—この句もみなさんの句評でもうつきています。僕も最初に言うた以外にありません。まじめ方が上手であったと言うありふれた最後の言葉が出ました。

藤波—相当突込んだ言いまわしも必要ですが然し程度と言うことも考察に入れねばなりません。句品と云う点からも上座におきかねます。どうも感心がもてない。清生—平凡なこともユニークな感覚で追究すればりっぱに成功するわけですが、前句に比して「低姿勢」という言葉が既に言いふる

されているため、いわゆる「先着の功」が認められなかったわけですね。

川柳も思想的な骨格を持つものと、感覚的な要素から構成されるものとの二大別されますが、最近とはかく日常茶飯の句が氾濫して退屈を感じることが多く、常識的な感慨には詩としての感激が少いわけです。川柳が風刺という面を持ちながら、論理を主題とした作品にあまり進歩がみられないのは残念なこと、むしろこういう種類の句からこそ、試作と努力を積み重ねることによって、新しい川柳が生まれ出るのではないかと可能性を期待したいのです。詩は批評であり、寅年だから言うのではないのですが、今年こそこういった面に果敢な前進をわれひとともに望みたいと思っています。

現代柳人録

- (一) 姓名 (二) 雅号 (三) 別号
- (四) 現住所 (五) 生年月日 (六) 出生地 (七) 職業 (八) 電話 (九) 自傳の句一句 (一〇) 川柳以外の趣味 (一一) 配偶者の有無 (一二) 川柳に手を染めた年月

(102) 宮口 笛生

- (一) 宮口賢治 (二) 笛生 (三) (四) 奈良市七条町六七四番地 (五) 大正15年9月17日 (六) 奈良県磯城郡川西村大字結崎 (七)

国鉄(機関士) (八) (九) 出勤のぎりぎりまでを男寝る (一〇) 園芸 (一一) 有 (一二) 昭和二十一年九月

(103) 児島与呂志

- (一) 児島好夫 (二) 与呂志 (三) 松溪 (四) 大阪市大正区南恩加島町二ノ二 (五) 大正11年1月23日 (六) 大阪市浪速区元町五丁目三八六番地 (七) 電車運転手 (八) (九) ほやいてもやっぱり夫婦です (一〇) 生花 (一一) 有 (一二) 昭和二十五年頃

(104) 影山つる子

- (一) 影山寿美 (二) つる子 (三) (四) 京都市左京区一乗寺松田町五三番地 (五) 明治44年3月27日 (六) 東京都 (七) 公務員 (八) (九) 楽しさ苦しさ (一〇) 名所旧蹟めぐり・観劇・銘菓をたべること (一一) なし (一二) 昭和三十年二月

本
福壽司

心斎橋筋大丸前

電話 三三四四番



川柳に強くなる本

なにをやってもむずかしい、川柳も例外ではない。ではどうしたら、それに強くなるか、それを謙虚に執筆者が語ってくれたのがこのページだ。

編集局

雑吟について

北川 春 巢



「川柳に強くなる本」を新人のために書けたの注文である。しかしこちらこそ、そんな本があったら読みたいものと思っているのである。新人に作り方のコツを、なんっておこがましい気がする。作りはじめて三十年近く経った今日でも、全く手さぐりの状態で作り続けているのだ、と告白せざるを得ない。

と云えば、新しくはじめられた方々はおじけがついて、川柳などやめてしまおう、と思われるに違いない。それでは身も蓋もなくなってしまうものだから、私の今ま

二

に依得した「強くなる法」を少しばかり書いてみようと思う。私にも私なりの法はなくはない。少しでも参考になればしやわせである。

川柳には「雑吟」と「課題吟」とがあり、どの柳誌にもこのおのおのについて欄が設けられている。また「課題吟」なら作れるが「雑吟」は作れない、という人がある。「課題吟」と「雑吟」との優劣論というが、本質論というかは議論も戦わされている。句会では専ら課題吟が行われているが、川柳が詩であるためには雑詠が主

であるべきだ、とも云われている。そして句会でも課題吟のほかに雑詠を持ちよっておられる所も一、二あるかに聞いている。

しかし、私の考えでは、課題吟雑吟の問題は、川柳発生の歴史に関係のあるもので、いずれを可とし、いずれを否とすると言っては云い切れないように思う。それは川柳発生のもともとは「課題吟」から始まったものであり、後に今でいう「雑吟」が作り始められたからである。もっとも初期の課題吟たるや、現在の名詞・動詞・形容詞などの題と違って「にぎやかなく」だのというように十四字の句であった。所が後には、この万句合の選者の初代川柳も、題にこだわらず作るようにさせた（柳傳第十六編以降）ので、これは雑吟というべきであらう。いずれにしても江戸時代の川柳作家、と云って悪ければ万句合の投句者もはじめ課題で作っていたのが、後

には雑吟を作るようになった、と云ってよいと思う。従ってどちらが可でどちらが否かは、一概には云えない。が課題吟から雑吟に進化した一あるいは言葉が悪ければ変化した一ことは歴史の示す通りである。私はこれを進歩と見、進化と見るのであるが、人によっては進歩と思わない人があるかも知れない。しかし歴史の流れはそういうに変化しているのである。課題吟なら作れるが、雑吟は苦手である、という人が多いのは、生物学でいう「個体発生は系統発生を繰り返す」といっているのではないかと、私は思われる。雑吟を作る所まで、まだ進んでいないのである。課題吟時代から雑吟の時代へと進むべきものが、まだそこまで進んでいない、と見てよいのではないかと、私は思うのである。

しかし、反対に初歩の人で、雑吟ならいくらでも作れるのだが、題を出されると一向に作れない、という人もある。こんな人は少数ながらあることは事実である。この理由の説明は私には出来にくい、があるいはこんな人は先に俳句でもやっていた人に多い。さもないければキリン児であると思う。

三

しからば雑吟の狙いはどんな所か、ということが問題になる。他人の真似はいけない。他人の詠んだカスを詠んだのでは駄目だ、と私達は教えられている。他人の句を読んでいて、それと同じような経験のある人は「成るほど」と、うなずく事がある。しかし、自分にもその経験があるというので、その通りを詠んだのでは、それは自分の句ではない。

初歩のうちは歩いていても、本を読んでも、その他人の句に似てしかも非なるものを探して句にするのがよい。他人の句で、自分をうなずかした句を頭から離してはいけなものである。これをノートに書き留めて、ひまな時には読んでいたという作家のあることも聞いたことがある。このことは云うは易くして、行うは困難である。本を読んでいる時ならば、肝心の本の内容が頭にはいらぬおそれがあり、歩いている時であれば、走って来る自動車にハネられるおそれもある。それでその練習をするのが、「課題吟」である、と私は考えている。課題吟の場合には、一つの課題について句会の参加者あるいは雑詠の投句者全部

が作句している。披露には自分と同思想の句が読み上げられ、自分の句が没になることもある。その時は入選句と自分の句とを比べてみて、発想法の違いや表現法の違いを研究する。自分の考え及ばなかったことを詠んだ句に出会ったならば、川柳ではあんなことをあんなふう云うのだな、と感得するのである。これは感得以外に道はないが、心易い先輩があれば尋ねてみてよい。句会に出席するのが川柳上達の早道だと云われているのも、雑誌で読むだけでなく、句会ではその感得の仕方が強烈なためである。そしてその感得したコツを、日常の経験に移して作句した場合が「雑吟」ということになるのである。

日常の経験と云ったが、道を歩いている時であれば「交差点」とか「自動車」とか「道路工事」とか、自分で勝手に題を出して詠めばよいのである。歩きながら考えると、先に述べた危険があるから、寝る前、日記を書く時などに思い出して作ってもよい。本を読んでいる時であれば、興味を引くような言葉なり語句なりをその本から選んで題にすればよい。

四

川柳には誰が云い出したのか、昔から三要素ということが云われている。「おかし味」「うがち味」「軽る味」の三つである。

この三要素についてこれから述べようと思うが、くわしくは路郎

先生著「川柳とは何か」(至文堂刊)をご覧ください。

先ず「おかし味」であるが、最近はこの「おかし味」の句が非常に少なくなった。強いて読者を笑わせようとすれば、落語や漫才の駄洒落に陥ってしまうおそれがある。これの甚しいのを「狂句」という。初心者はこんな句を見て、川柳とは滑稽俳句だらけに考えて、とび付き易いがこれはいけないのである。それで私は、強いて「おかし味」のある句を作ろうと努力する必要はないと考えている。「おかし味」、「笑い」に関しては私も興味を持ち、かつて小研究を本誌に発表した。(「川柳における「笑い」について」第三九六号)

次に「うがち味」であるが、私はこれが川柳の根本であると思うので、少しくわしく述べたいから、第三の「軽る味」の方を先に説明することにする。

「軽る味」というのは、「お茶漬の味」だ、と路郎先生も云っておられるが、「当り前のことを詠んでありながら、何となく引きつけられる」というような句で、下手をすると「さよ川柳」になってしまう。相当年季を入れた作家でない「軽る味」の句は作れない。私などまだまだこの境地には達していないのである。私が出来ないから初心者にも出来なくてよい、というわけではないが、私に出来ないものを説明のしようがないのである。

裏町も水が流れて京に住む
水客
など「軽る味」の句ではないかと思ふ。誰でも知っていることで、云われてみてハハシと思ふ、これが「軽る味」である。

五

「うがち味」が川柳の根本である、と前に云ったが「うがち味」とはどんなことかというところ、これも分っているようで一口には云えない。話を聞いて、「なるほど」と膝を打つ感じ、これが「うがち味」だとぐらいいしか云えない。

例を挙げてみよう。朝日新聞に「きのうきょう」という「囲み欄」があることは、どなたもご存知のことと思う。昨年後半期、この欄へ柳界の大先輩川上三太郎氏が執筆せられていた。さすがに川柳の大家だけあって、書かれることが誠に「うがった」ことばかりであった。私は読む度に膝を打って「なるほどなァ」と感心していた。長くなるからその全部を紹介することは出来ないが、一、二を紹介しよう。

第一例。「右手は左であること」というのがあった。これでは何のことかお分りではあるまいが、観光パスのガイドは、お客と向い合って立っているの、右の手を出す時には、「左に見えますのは……」と云わなければならぬ。左手の時は「右に見えますのは……」である。ところがある時、新米のガ

イドだったとみえて右手を出して「右に見えますのは……」、左手を出して「左に見えますのは……」とやったというのである。お客はガイドの手を出した方を見て目的物は見えないのであった。しまいにはお客の方で、手とは反対の方へ頭を向けるようになった。これが「右手は左であること」である。

こういう発見が「うがち味」である。云われてみると誰でも「なるほど!」と思ひ当るであろう、が人に云われるまでは自分で口に出して云うことは中々出来ぬものである。そのような発見を十七音字にしたのが「うがち味」の句である。

第二例。昨年末には「金をひろう」というのがあった。これが丁度年末の新聞に出たというのもタイムリーであった。浅草の金竜館で知らずにガマ口の上に腰を下ろし、それを発見して苦心してふところにいれ、「五段目の定九郎」みたいに胸でしらべ、おさつを十枚十五枚と数えているうちにガタガタふるえて来た様子が、軽いタッチで書かれている。「なるほどうまいなァ」と思った。これもやはり「うがち味」だ。軽いうがち吟だから「軽る味」と云ってもよい。「軽る味」というのは「うがち味」の軽るいのだと私は解釈している。

私はこれを読んだ時、本社の忘年句会に路郎先生が「ショック」の選で

特賞が当りふるえが止まらない。
静馬

を「天」に抜かれたことを思い出した。句会の場合には「課題吟」であるが、静馬氏の場合も三太郎氏の場合も境は大体同じである。

静馬氏の何かの折の経験が、この場合「課題吟」に思わす句になったものであろう。こうみえて来ると雑吟も課題吟もつまりは同じなのだといことになる。三太郎氏のこの文章を句にすれば、静馬氏のこの句のようになるであろう。それを「天」に抜かれた路郎先生の選句眼には、今さらのように驚いたのである。

第三例。話は少し古いが、一昨年の後半には兵庫県知事の坂本勝氏がやはりこの「きのうきょう」欄に筆を執っておられた。(今年も現在また書いておられるが……)坂本氏は人も知る随筆家である。年末のことであるから、毎年のことながらその年の十大ニュースというものを新聞やラジオが報じていた。坂本氏も「十大ニュース私家版」というものを書かれた。その中に「二等車はやっぱり三等車だった」というのがあった。これは一昨年の春から国鉄が三等車をなくして一等二等だけとし、今までの二等を一等、三等を二等と名付けて同時に運賃の値上げをしたことを云われたものである。この云い方、表現が「うがち」である。

第四例。NHKテレビの子供番組に「チロリン村とくるみの木」というのがある。これは「承知の

方も多いと思うが、人形劇であつて、チロリン村の村長のトウモロコシ、それにクルミや玉ネギの親子、その他ジャガイモ、アスパラガス、カマキリ先生などの大人達と、南京豆・甘り・バナナ・リンゴ等々の野菜・果物の子供達、ネズミ・カップ・モグラ・ドコガメ・イタチ・コウモリ等々の動物達がそれぞれその性格を発揮して登場し、見ている子供達や、時には私自身をも楽しませてくれるのである。その舞台として、村の銭湯がよく使われるのであるが、その銭湯の入口に「おしべ」「めしべ」と書いてある。「男湯」「女湯」というべき所である。この「おしべ」「めしべ」という表現が「うがち味」があると私には思えるのである。

以上「うがち味」というものの例を四つ挙げたが、第一例には少し滑稽な所があり、第三例には理屈めいて皮肉な所もある。第二例は「軽る味」が強く、第四例はこれも少々理屈っぽい。従って「うがち」の度合により、ニュアンスによって滑稽ともなり、皮肉ともなり、軽る味にもなるのである。つまり「うがち」は川柳の特質のように私が云うのは、この点を指しているのである。

六

以上は、初歩の人に知ってもらいたい、私の体得した川柳の理論であるが、理論をいくら知っていても川柳がうまく作れるものではない。

ない。そこで私は昨年度の「川柳雑誌」一月号から十二月までの句の中から「うがち味」の強い作品を選び出して、サンプルにお見せしようと思う。その後は自分で、自分の生活から「うがち味」を発見して作句してみるよりはかに上達の手はない。上達法は多読多作にある、と云われるのはそれである。

眼を愛すいらぬ時には閉じておく

雄 声

いただきまアすと役人は平気なり

甲 吉

殴られたからさん付で記事になり

宗 太郎

禪の仕方も知らぬ右翼が居

花 村

鶏一羽死んで一升飲んじまい

村 風子

もう死ぬと云うのに寄付を出し惜み

路 郎

先ずテレビ据えて雨漏り放つとかれ

光 郎

臨終へひとり時間表を読む

白 星

もちろんまだいくらでもあるが、これくらいでやめておく。その「うがち味」をよく感得して頂きたい。重ねて云うが、川柳にはどの句をとってみても、多かれ少なかれ「うがち味」は含まれているのである。

七

最後に、表現法について、二、三気付いた点を申し上げて稿を終りたい。

(イ) 語イを選ぶこと

「その句の表現に適した言葉はたった一つしかない」というのは名言で、五七五のどの語についてでも云えるわけで、語イを選ぶことは大切であるが、特にその手の一つが当を得たために、句が引き立つことがある。

月の裏みたいな肌へ塗りたくり

一 鶴

「月の裏みたいな」がこの句の焦点である。「みたいな」とか「うな」を使った「比喩法の句」は「川柳とは何か」に路郎先生がよくわしく説明しておられるが、ソ連が人工衛星船を打ち上げて月の裏の写真を撮ったのと丁度タイムシンクに生きて来たのである。

草野球母呼びに来てピッチャー去ぬ

路 郎

この句は「ピッチャー」が焦点である。

十七才大人二三歩退かし

喜 由

十七才だけどうちの子牛を飼い

蓑 流

ほんほんも十七才でおそれられ

左 文字

この句の焦点は「十七才」である。昨年は十七才の少年がよくいろいろと事故を起こした。「十七才」としたからこそ、句が生きて来たと云えるのである。

腔かじり難波の宮とか堀つてます

堀 子

「難波の宮」がこの句の焦点である。「難波の宮」という言葉で、

もろもろのそれに似たものまで想像させ得る力を持っている。

このように、焦点をなす言葉が適当なために（「動かぬ」という）句が生きて来るといふ例は多い。従ってはじめに書いた、本を読みながら、その本から焦点となるような言葉を書き抜いておいて、逆にその言葉を使って作句する、ということも出来るのである。

左に焦点のしっかりした句の例を挙げて、その言葉に傍線を引いておこう。

月の玉も緑に染まる保津下り

尚 史

拍手してやれば三番まで唄い

可 佳

山茶花を散らし嫁の荷運び

きさ子

盛り皿のリングの傷を眼で調べ

一 声

パチンコへ五黄の寅の意地が出る

草 人

お年玉集めに二太郎今日も留守

東 洋男

（ロ）疊み句のこと

「疊み句」のことも、路郎先生は新川柳講座（水武書房刊）に書いておられるが、「川柳」を探すと、割合多く見つかるのである。これも表現法の一つとして覚えておくように思う。

ニッポンの隅で生きている生きていても座ってもどっこいさどっこいさ 千 容

サヨナラ 水 客
朝膳の銚子名幹事名幹事 八九寸
きかれたら知らぬが勉強せい勉強せい 青 園
甥 近 く

払えども払えどもイメージ笑いかけ 一 鶴
着ぶくれて着ぶくれて病床の身をかばい 花 美
しんどかったしんどったと仲人嬉しがり 醉 舛

同じく言葉を繰り返す表現法に「重語法」というのがあるが、「重語法」の例は案外に少なかった。

ベチャクチャベチャクチャ 男性飼育法 涼 人
ジングルベルジングルベル 座敷丸く掃き 実 男

なお、前句の「男性飼育法」、後句の「丸く」はいずれも前項に述べた焦点を捕えた言葉である。

（ハ）対句のこと

疊み句は同じ言葉の繰り返しであるが、対句というのは、似たような意味の言葉やあるいは反対の意味の言葉を重ねることによって表現を強めるものである。例を挙げれば分つてもらえると思うが、いろいろの種類がありこれも案外に多くて一つのテクニクと云えると思う。

チャンバラが好きな夫婦で世話も好き 一 傘
この句は「好き」が対句になっている。
妻と子を愛し二号をも愛し

可住
ドドンパにおびえ人出に又
おびえ 緑之助
淡白はよし米の味水の味
八歩
初詣で警官もおとりスリもお
路見
対句の所が脚韻を踏んで、口調の
よい句になり、句を引き立ててい
る。
父も脱ぎ子も脱ぎ母も脱い
で夏 潮花
「脱ぐ」が三つ重なっている。
政治家は疑い 科学者は信
七面山
着る物が出来て恋人まだ出
来ず 寿栄
三面へ怒り社説になだめら
れ 柳志
歌に首振るほど鍼を振らぬ
真奇
言い足りぬ明治言い過ぎる
雄声
昭和
ドラマはすんだが人生はつ
づく 清生
右の如く、反対の意味を重ねた
ものもある。
子がないかざくろはこぼれ
柿はうれ 隆文
「ざくろはこぼれ柿はうれ」とい
う七・五に、私は中学時代漢文の
第一時間目に習った「花笑ひ、鳥
歌う」という対句を思い出した。
その他、対句の例を以下に挙げて
みよう。
バー 笑し白百合の嘘 薔薇の
嘘 薫風子
恋たのしだまされてても恋

たのし ト占
春が来るまた斗争の春が来
る みのる
白髪なり髯なり色気また捨
てず 路郎
解散で飲み当選で飲み議場
で寝 天悟空
子供に起こされ妻に使われ
日曜日 素身郎
世話好きのお人好しのと馬
鹿にされ 初甫
遊ぶには惜しく働くには疲
れ たつよ
アルバイトしてます 恋もし
ています 一乃字
(二) 文句取りの句
「文句取り」というと何となく古
臭く聞こえるが、有名な歌や文章
や諺などを持って来て、句を構成
するもので、流行語を使った句も
これに属すると云ってよい。従っ
て作者にはその文句の意味が分っ
ていても、読者の方に分っていない
ければ、何のことか分らぬ句にな
ってしまうおそれがある。流行歌
など全部を知っているわけではない
ので、流行歌を持って来たよう
な場合に、こんなことがよく起こ
る。
交通マヒ向いは遠くなりに
けり 花村
路郎先生が「名句と難句」の欄で
解説しておられる通り、この句は
「明治は遠くなりにけり」を知っ
ていなければ、十分に観賞するこ
とは出来ないものである。同様に
教養と美人で若さは遠くな
り 寿栄

も、同じ文句取りと見てよからう
眼に青葉女の薄着目立つて
来 水洞
これは芭蕉の「目に青葉山ほと
ぎす初かつを」から取った「目に
青葉」である。
おっさんおっさんとは僕の
ことらしい 三歩
「おっさん、おっさん」は笠置し
ず子の買物ブギの出だしの言葉と
見てよいと思う。
花よりもダンゴの客がここ
かしこ 独仙
「いろはかるた」の「花より団
子」であることは云うまでもな
い。
三十年かつがつながら肉と
ねき 好郎
路郎先生の名句「いつまでも肉と
葱との仲であれ」を知っていない
と、この句は分らぬであらう。
人間どもそこのけそこのけ
ダンゴが通る 天悟空
一茶の俳句「雀の子そこのけそこ
のけお馬が通る」から取ったもの
である。
邪魔者は殺せとばかりダン
ブカー 代仕男
同じダンブカーの横暴を詠んだも
のだが、映画の題名「邪魔者は殺
せ」から取ったもの。
積善の余慶か知らぬが貧乏
し 快夢起
「積善の家に余慶あり」の諺から
取ったもの。
猫よりはましだと言う子だ
け残り 知恵美
「猫よりはましだ」とよく俗間に云

われている言葉引用したもので
「うがち味」の十分ある所も感得
して頂きたい。
お遍路の夫は妻にいたわら
れ 鳴枕
「壺坂靈驗記」のサワリの文句で
ある。
カスガイの役目した子もも
う二十才 実男
「子はカスガイ」から取ったもの
である。
仲人の腕は牛連れ見つけ出
し 弘道
「牛は牛連れ馬は馬連れ」という
言葉がある。
恋なつて有楽町に用もなく
路郎
数年前にはやった「有楽町であ
いましょう」の歌から取ったもので
この歌を知らない「有楽町」が
何のことか分らぬであらう。
選挙戦つわもの共のお国入
り 旭童
芭蕉の「夏草やつわもの共の夢の
跡」を、私は思い出した。
なお、私は流行語についてかつ
て本誌に所感を書いたことがある
が、流行語は諺などと違って生命
の短いものである。流行歌でも同
じである。作句した時には読者を
アツと云わせることが出来たかも
知れぬが、長年の後まで生命があ
るかどうかは、ちよつと疑問であ
る。昨年はやった流行語としては
「リバイバル」「所得倍増」「レ
ジャー」、有難や節の「有難や」
などがあり、これらを詠んだ句も
多い。

スマートで
着心地良い

GOLDEN
O.S.K.の
紳士服

各地特約店に有り

リバイバルソング大正翠も
見せ 柳志
電化したレジャー出歩く
せがつき 陽子
レジャーブームの春を月賦
で身をかため 牧人
レジャーブーム哲学書をひ
もとかん 蛙殿子
パチンコで今日のレジャー
は終るなり 花実
倍増の春もやっぱり寝正月
倍増へまだスタートにも着
けず 緑之助
年寄りの耳をくすぐるアリ
ガタヤ 一傘
有難や信心の錢でビルを建
て 尉介

八

なお、もう一つ初心者の人々に知って頂きたいことを書き忘れている。それは「川柳の対象は何か」ということである。

俳句には歳時記というものがあって、春・夏・秋・冬及び新年に分類されている。新人はそれを片手にして季語を探し、その季語を使って作句している。春、夏、秋、冬、新年にはそれぞれ自然（時候・天文・地理）、生活（生活・行事）、生物（動物・植物）という項目に季語が分類せられている。つまりこれだけしか詠めないわけである。（無季俳句というものもあるが、これは論外である。）

川柳にはこのような歳時記というものは無い。しかし川柳にも分類されたものはあることはあるのであって、一番古いものは「俳風柳樹抄」という本である。この本は、「柳樹」と同じく初代川柳の選句の中から抜いたもので、はじめは「古今前句集」と名付けられて、寛政八年（一七九六年）に発行されたものを、後、享和元年（一八〇一年）に書名を変えて出されたものである。その分類には春、夏、秋、冬の四季外、哀別、神祇、釈教、恋、無常、遊里、戯場、史談、故事の項目が見られる。路郎先生著の「新川柳鑑賞」（川柳雑誌社刊）には①四季、②恋、酒、果物、③夫婦を中心に、④女、男、⑤職業、職業人、⑥上役、下役、⑦衣、食、住、⑧金、⑨趣味、⑩旅、仏、神、山動物、

植物、⑪雑、と分類してある。

「柳樹抄」の分類はどうせ俳句や俳諧を参考にしている分類であろうが、歳時記の分類よりはぐんと人間臭を増している。路郎先生の分類に至っては全く先生独自のもので、この分類を見ると、人間生



課題吟について

清水白柳

活のあらゆる方面に亘っている。つまりどんな句でも、この分類のどれかにはいるということ、我々の目にする物、聞こえる音、考える事、何を詠んでも差し支えないということになるのである。

路郎先生著「川柳とは何か」の中で「雑吟と課題吟」という項の冒頭に「雑吟」というのは折に触れ時に臨んでその人の人生観、社会観世界観と云ったものを詠むのである。その点から言って川柳は雑吟だけ詠んでいけばいい訳である」とのべられて居ります。そして課題吟は「作りはじめは題がないと、何を詠んでいいのかサッパリ見当がつかない。そこで「親」なら親と云う題を与えて。そこで作家は「親」と云う焦点を目標に過去、現在、未来に於ける親を対照として詩想を喚起し作句するのである。そして作家の脳裡に表われるあらゆる親の影響を、捕捉するのである」と書かれて、課題吟の在り方をハッキリ示して居られるのであります。

私がいつの間にか心ならずも、課題吟万能論者のようになってしまったのは、いくつかの理由があるように思います。すけれども、それはそれとしてここでは課題吟のあり方や課題吟を作るときのことなどを考えて見たいと思ひます。

ある支部の句会で言ったことですが、ある一つの課題が与えられましたら、その題を中心にして自分の生活をふり返って見ることで、そしてその題に関係のある事柄を思い浮かべてゆくことが先ず第一です。

自分の生活と云っても巾の広いものですから生活の中の一部、夫婦関係のこと、兄弟のこと、親のこと、子のこと、金銭のこと、食物のこと、……など題の關係のありそうな事柄を思い浮かべてゆくのです。そして、何か一つの事柄に思い当たった時に、その句にしようという事柄に焦点を絞って表現方法を考えることです。私はいつもそうした身辺の事柄から真剣な気持ちで課題吟といふも安易な態度でなげやりな作句をせずに、雑吟を作るときと同じ気持ちで一句を創作することに心掛けていたのです。みなさんもきっとそうした気持ちで作句に当たって居られると思いますので、課題吟と言つても決して軽視しないで雑吟と同じく、創作吟として扱っていいものではないでしょうか。

またある時は「課題はライターの発火石のようなものであって、題を与えられた時に、過去の何処かで出合った事であるとか、悲しかった思い出、或はたのしかったことなどが頭の中にひらいて句になるところがあるのです。題によってその人の人観が、また社会観が、一句を生み出すきっかけを作ってくれるのですから、その時の課題は、ライターの石が発火する役目を果たしてくれるようなものである」とも言ったことがありますが、そんな話をした時ある作家が「それはあなたが経験の深い作家だから題を与えられた時に、そのひらめきがあったり、また句にまとめることが出来るだけ共、経験の浅い作家にはそうした境地には、なかなかなれるものではない、どうしても課題吟は題に思ひつら」と言われたことがあります。そこでまた、「川柳とは何か」の中から抜萃させて頂く「作家が課題によって多作することは一つの作句練習である。それはバイオリンの練習でも毎日ドレミハの練習をしているのに比すべきものであつて、課題吟の主たる目的は作句の練習にある。絶えず作句を練習することによって、表現技巧の練習をしていけば、イザ雑吟を作ろうとする場合に、表現上渋滞を来さない」と云う可能性が多いからである。

と課題吟の主たる目的を示されて居るのであります。そして「中には雑吟と課題吟と作句態度を異にし、作風の全く違った作品を作る作家もいる」と警告せられて居るのであります。この作句態度を異にしている作家の作品が課題吟の軽視せられている重要な原因になっているように思われるのであります。

何故課題吟に限ってそうした作句態度をとるのでしょうか。誌上に於いての課題吟には余りですが、たことは見られないようですが、句会での課題吟によく見られるのは残念に思います。それについては一月号川柳誌上で七面山氏が「句会と川柳基本法について」でなげかれていますように、句会のあり方に多くの缺陷を見出すのは残念ではありますが、そのために課題吟の軽重を問ふことは早まったことではないかと思ひます。現在の句会のあり方では、出席した以上一句でも呼名しないと淋しい気持ちになるので、いきおい安易な句を多く出すことにのみ重点を置いて見られるので、そのためにますます課題吟が軽視される傾向になってしまつて居るのです。もっと真剣に課題吟と取組んで課題吟を重視される方

向に持ってゆきたいと願って居るのであります。

折に触れ、時に臨み、雑吟の出来る素養のある方は誠に恵まれた天分を持って居られる人であって羨望に堪えない次第であります。

私のように二十何年間、雑吟らしい雑吟を作句して居らない川柳家は、川柳作家としては失格かも知れませんが、一度、題を与えられと、水を得た魚の如く、は少しオーバーではあります。作句を作り句が生れるのであります。課題によって川柳を作るのではなくて課題によって句を生み出す努力をしているのであります。課題吟の良さを示す一例として「大万川柳」があります。今月で百三十回にも及ぶ老舗で毎月のように新進気鋭の作家やベテラン作家が競詠して優秀な作品が生み出されていきます。最近の句を見ても

水客

正一

宗太郎

生薑

女社長

女社長

女社長

女社長

されるということが出来るようであります。

自分の句を引合いに出すのは憚談だとは思いましたがおゆるしを願って二三書いて見ます。

春日遅々として仁王さんねむくなり

終戦後間もなく昭和二十三年奈良で川柳大会の催された時の兼題「仁王」の入選句ですが、仁王さんを外部から描写しただけでなく仁王を通じて作者の春日遅々とした感覚を表現したのです。課題を一度吸収して、吐き出すといった手法で出来た句であります。

釣鐘の余韻と共に坂を降りそれから何年かしての矢張り奈良の山焼き川柳大会の「釣鐘」の入選句ですが、この句の素直さともいえますが、奈良へ行くたびに感じていた事が、この課題を与えられたときにスラスラと句にまとまったのであります。どちらも自分の持ち句としてよく短冊に書く句であります。

青春をあえなく女中して過す

あやめ池で催された川柳大会の「青春」の入選句です。ある女性の青春時代を、あえなくという四文字に盛り上げた苦心の作品です。だれでもが青春を謳歌するであらうところを逆に考えたところにこの句の面白さがあったと今でも思っているのです。一女性への思いやりをいまでもこの句の中に感じているのです。

海老の眼に今宵きらめくものばかり

京都川柳社の大会での句で題は「海老」でした、今でも結婚の御祝の短冊には必ず一枚は書く句です。この句も、海老をたまた外側からかざらただけの句でなく句主が海老の眼を通して、きらびやかな、その雰囲気におどろきを感じさせた表現方法がよかったのだと思っています。

女湯のニュース女を傷つける

北国川柳大会での入選句で課題は「ニュース」でした、ニュースといたばくせんとした題には何か具体的なものをつかまないと句に焦点がなくなるので、女湯でのニュースをえらんだのです。そしてそれをしゃべっているという描写だけでは平淡になるのです、それで女を傷けるという風刺を描いたのです。

このように課題吟を作るときにも自分の生活の中から課題を見つけて、雑吟を詠むときと同じ心構えで作句に向かっているのです。ですから課題吟も私にとっては一句一句が捨てがたい句ばかりなのです。たとえ没になった句であっても、句帖からは消し去らずに、大切にしています。それは私の心の記録なのです。

不朽洞賞カップ

三年連続獲得

不二田 一三夫

不朽洞賞カップをボクのような

者が、三年連続で獲得するなんて、おそらく皆さんのほうが、

「夢のようだ」と、おっしゃるにちがいない。まったくそのとおりである。

川柳塔にでているボクの句を見てもわかるように、実にまずい作家であることは誰よりもボク自身がわかってはいる。

「わらわさが知らないのは標語の關係だね」とは小松園氏の批評である。

「句想のひろいのは標語のおかげだよ」

これは故須崎豆秋氏の批評だった。どうやらボクの川柳は、標語をやめたときはじめてボクの川柳が生まれるようである。だが標語はボクの生活の一部なので当然やめないつもりだから、ボクの川柳はこのまま進歩しないようだ。

とにかくこんなボクに、不朽洞賞を三年連続でとらせてくださったのは路郎先生のご指導力によるものだが、常に阿倍野支部の諸先輩が、これまた猛烈にハッパをかけてくださったこともありがたかった。

昨年は落ちたが四年連続で大万川柳のベスト・10には入れたのは梅里氏のム

日本 中国の文化財をあつめた美の殿堂

大和文華館

松浦屏風 一字蓮台法華經 寝覚図 書簡 陶磁彫刻 金工 染織など国宝や重要文化財をおさめています

開館 毎日10時～4時(月曜休館)

学園前駅下車すぐ

近畿日本鉄道

近畿日本鉄道

近畿日本鉄道

近畿日本鉄道

近畿日本鉄道

近畿日本鉄道

近畿日本鉄道

近畿日本鉄道

近畿日本鉄道



柳界展望

句会

▼本社二句会は七日(水)午後六時から千日前電停前自安寺で開催する。交通至便の会場故、柳友御誘い合せの上多数の御出席をお願いする。▼南区医師会文化部査林川柳会(大阪市)新年句会は一月二十三日(火)午後七時半から南区三休橋南詰中島小児科診療院棟上で開催。▼南海電鉄川柳句会(大阪市)は一月十八日(木)午後六時から難波親和クラブで開催。▼コクヨ川柳会(大阪市)句会は一月十九日(金)午後五時半から黒田国光堂で開催。▼大阪通信病院川柳句会は一月二十日(土)午後二時から五階会議室で開催。以上路郎主幹出席。▼川柳雑誌社婦人友の会新春句会は一月二十一日(日)午後一時から中島小児科診療院棟上で開催。▼川維岡山支

部一月例会は十三日(土)岡鉄クラブで開催。▼かがみ百号記念川柳大会(岡山県)は一月二十一日(日)午前十時から鏡野高校和裁室で開催。▼ひろしま川柳会忘年会は十五日(金)午後六時から森脇西香里居で開催。▼柳新芽一同忌川柳句会は一月二十一日午後六時から新津市駅前柳都本社で開催。▼黒石ねぶた川柳社不浪人・蝶五郎忌句会は一月二十日午後六時から後藤柳柳居で開催。▼平安川柳社創立満五周年記念川柳大会は昭和三十七年四月一日(日)午前十一時から午後五時まで京都市上京区烏丸通中立売下平安寮で開催、兼題(A)平和・拳・進む善意・春雑詠・山・結ぶ(本社副主幹中島生々庵選)、各題三句、出句は大会当日、切午後一時。兼題(B)未来・映える・仲間・鬼

・清潔、各題三句を題毎に別紙に明記、住所姓名を併記して三月十五日迄に京都市中京区夷川通烏丸西入、平安川柳社宛、発表誌希望者のみ五十円封入送付のこと。▼中部川柳発刊十周年記念並第九回中日地区川柳大会は、第一部(紙上大会)兼題、旗・財布・OK・裏・徹夜・ベテン師・湯・生涯、各題別紙に三句宛明記、投句料百円封入の上二月十日までに名古屋市中村区広小路西通二ノ二五中日川柳会事務所宛。第二部(公開大会)は三月十一日正午から中部日本新聞社四階ホールで開催、兼題銅・知恵・ピンチ・青広・豪華、席題三題、切三時会場費百円。▼第三回青森県誌上研究大会は兼題、エトランゼ・小屋・柱時計・思い出・花東・マスコット・嵐・ベツト・灯・童話、各題二句ずつを西洋紙四分の一の用紙に明記、記名の上二月末日までに青森県下北郡川内町岡田稲人方大会係宛送付のこと。会費百円。

消息

▼路郎主幹は一月七日午前十一時から生国魂神社事務所で開催された大阪芸文協合理事会、一月十一日午後二時から市長公館で開催された新年互礼会にそれぞれ出席され、短詩文学のため一層の尽力を誓われた。▼渡辺曉童氏(愛媛県)は旧年末、夫人と同伴、明石と淡路のお孫さんを訪ね、姫路城見学、玉造温泉、出雲大社参拝、元朝に嚴島神社に参詣して結婚三十年を迎える前祝いの旅をされた。「新小屋にも大社造りへ千木をつけ」▼若本多久志氏(西宮市)は元日の午後から車で岡山へ出発、後楽園、吉備神社、倉敷を経て鷺羽山に登り、山麓の下電ホテルで宿泊、瀬戸内海の黎明を觀賞された。▼山田季賛氏(広島県)

麻生路郎著 好評噴々

川柳の味方

価二五〇円
送料八〇円
B6版
二五〇余頁

川柳の味方・五百数十句

(毎日新聞評)

麻生路郎さんは明治三十七年から川柳を手がけているというから川柳歴はもう五十五年にもなる。この新著は麻生さんが毎月出している「川柳雑誌」に掲載されたものを中心にその他の雑誌や句集からひろった五百六十三句について、ひとつひとつ丁寧な注釈を加えて、鑑賞の手引に資そうとしたものである。

発行所 川柳雑誌社
大阪・住吉区西五丁目二五番地
電話大阪671-6611・一八
京都原口 大阪七五〇五〇

不朽の人々



南海電鉄の社長 安井 武

転勤は一階変っただけのこと

(主 水)

南海電鉄に勤めて二十年、その半分十年を今の運輸部計画課に籍をおいていますので転勤の気分も忘れるほど長く味っていませんが、去る人・来る人あるたびに送別会・歓迎会にとぬけることなく出席しています。案外こんな転勤が多いのとは違いますが。

草は南蛮寺の夢の跡」の句を寄せられた。▼八木摩太郎氏(堺市)経営の三和自動車工業株式会社へ、新大阪新聞社の杉本企画部員秋田Aスケ、Bスケの諸氏が来訪、自動車の修理塗装の状況などを見学されたが、工場は時ならずなごやかな風景になったとの由。▼工藤甲吉氏(青森市)の令嬢幸子さんが十二月十一日めでたく結婚された。一人娘にお婿さんを迎えられたこととて、「嫁がせて我れも子供の親だった」と全く感無量の態で居られる。▼鳥取周甫さん(岡山県)から、「慌しく年の瀬が迫りましたが、両先生にはお達者ですか。私も七十三才になります。詰代が切れましたら前以て

お通知下さい。死ぬるまで続けたと思って居ります。」▼山田季賛氏(広島県)は宿病の肝臓障害をもつとせず、一月十三日の本社新春句会にはるる出席され、夜行で直ちに帰広された。「大阪の自動車地獄を見て戻り」▼山内静水氏(竹原市)は本誌十一月号近作柳樽欄で五句入選、第一頁を飾ることが出来たので、益々勉強するよう心に誓われたとのこと。▼若本多久志氏(西宮市)は一月二十一日午後十一時五十六分パンアメリカン機で羽田空港を出発、渡布されたが、ホノルルへは二十一日午前十一時四十五分に到着予定とのこと。▼橋高薫風子氏(大阪市)は一月十四日家族連れて南

紀白浜温泉に遊ばれたが、子供へのサーブに疲れるのは同じことだと、「海の入日へ岩礁のみ染まろうとせず」の句信を寄せられた。

句 集

▼川柳津久楼会三周年記念自選句集「蝶」が昭和三十六年十月呉市広町末広随喜園内広川柳津久楼会から発刊された。所員四十余名の自選句集、非売品。

慶 弔

▼水谷竹莊氏(大阪市)の二男一郎氏は南海高野線北野田美原町に新居をもたれ、近木順子さんとの良縁整い、和歌山通信診療所、津村峰事務長の仲人で、一月十一日、電通会館で華燭の典を挙げら

れた。お慶び申し上げる。▼花月亭九里丸氏(大阪市)は一月七日午後三時二十分高血圧で療養中急性肺炎を併発、死去。年七十。告別式は九日午前十時から東住吉区山坂町一法楽寺で行われた。漫談家としての氏は余りにも有名だが、療養中は川柳作句にも励まれ病床吟を本誌に投句されていた。先月二十六日妻ヨシさんが死亡した際よんだ「かわいそうに四十年間手なべさげ」が遺句となった。▼西森花村氏(大阪市)の令嬢菊江さんは病氣療養中十二月二十八日長逝された。年四十一。告別式は三十日東淀川区三国本町三丁目三一の自宅で行われた。謹悼。

転 居

▼三井静夢さん(香川県)は香川県多度津町桜川、三井外科方へ転居された。

番地変更

桜川不水氏は区画整理で番地が下記の変更された。下関市東大坪四町十八の十一北坂一夫。

電話開通

▼真鍋一瓢氏(大阪市)の宅に電話が開通した。桜川局(561)八三八六番。

正 誤

▼十二月号四十頁上段十行目の句、蝶とあるは蜂の誤りに付訂正
▼同四十四頁二段十五行目の句、折込んだとあるは打込んだの誤りに付訂正。

不朽洞会から

☆新会員紹介

一月

▼浅野芳朗氏(小松市)正

——宗太郎氏推薦

▼宗高矢寸志氏(岡山県)家庭事情により一月限り退会された。

新 刊

▼田中美喜子著、ずいひつ「ピンクのカーネーション」B6版表紙共一八二頁定価二百円。熊本市池田町神田。著者は不朽洞賛助田中辰二氏の令閨。発刊の言葉に「私はどうしても書き残したかったのである。」とある通り母親としての強い情熱がほとばしる快著であり大方の一読をおすすめする。

作家と環境



・八木摩天郎・

私の書斎に、曾我廼家五郎の書いた色紙一葉がある。その額は、かつては五郎がその実妹に贈ったのを、私に贈られたものである。而して曰く、五郎も私も、子供が無いので永く保存して欲しいと。その色紙は、五郎が物故する三年前恰度無声劇の当時の筆で、瓢箪を絵画いて、その上に、

祝酒いただきまする果報者

と、句を書いて五郎好みの額に入れて贈られたものなのである。

私は五郎が好きである。それは郷土を同じくすると云うだけではない。五郎はこよなく郷土を愛した。のみならず郷土出身の芸能を志す人々を愛し、その一団に抱擁して、その人の芸を誘導したその五郎の郷土愛の精神が好きである。

一堺漁人のペンネームに依って親しま

れた曾我廼家五郎は、明治十年、堺市錦之町東二丁目因寺に生まれ、本名和田久一、祖父は僧侶、父は代言人——今の弁護士——で六才で父に死別し、商家に丁稚奉公をした事もあった。彼は後世長く喜劇の王者たる地位を占めたのも、幼少の当時、五郎の乳母が芝居好きで、堺宿院の「卯の日座」に見物に行ったのを乳母の肩越しで見たのが、五郎の芸道に志す芽を植付けた訳である。その芽が、きざして、十六才の時、劇団に入り旅廻り役者として、転々する等、苦難の道を歩んだが、その間に芸を磨き「大阪にわか」の系統を引く新喜劇「五郎劇」を創始し、一面、自ら執筆して庶民的な喜劇を上演して、大衆の好評を博し、その自作自演美に一千を超え昭和二十三年一月、七十二才で没したのは人のよく知るところであるが、思えば彼の一生は、芸道一筋に生き、晩年、無声劇として、見る者をして、その芸懐に涙をしばらしめた。

むべなる哉、堺市は、市制施行七十年の記念誌に「堺市物故先覚者列伝」を編む際に、今誌に彼の名を録する、実に彼の芸道一本の精魂と、彼の郷土愛の精神が市民に敬仰されたのに外ならないのである。

これと軌を同じくする人に沢正があ

川柳不朽洞会

(見月)

指導

麻生路郎

賛助

長谷川一徹

中田守雄

白川朋吉

中村祐吉

田中辰二

岩崎愛二

中村直勝

麻生磯次

井上吉次郎

島浦精二

恒藤恭二

洞友

田村孝之介

山本雨迷

山路閑古

柴谷宰二郎

麻生段乃

橋本緑雨

高鷺亜純

沢田四郎作

東野大八

速水真珠洞

中島紫痴郎

戸倉普天

不朽洞会員

中島生々庵

奥村丹路

上田翠光

木村孤浪

戸田古方

市湯没食子

土井文蝶

若本多久志

川村好郎

松江梅里

正本水客

黒川紫香

丸尾潮花

小西無鬼

西いわを

八木摩天郎

武部香林

北川春渠

寺井鏡々

古川麗花

前山北海

三輪峯園

大坂形水

井上湧三

西垣錦風

築山快夢

市岡曉舟

白砂旋風

藤本満年

羽佐間柳葉

福田安夢

吉田圭堂

国弘半休

長野井蛙

友淵貴山

太田良子

直原七面山

西森花村

河村日満

足立春雄

榎南夏六

石川侃流洞

安岡珊枝郎

牟田一哲

河村瑞川

木村千容

田垣方大

野村味平

木村水洞

福田丁路

真鍋一瓢

佐野白水

後藤梅志

平尾太希志

木口賀峰

小西雄々

菊田いさむ

山崎阿茶

岩崎文秋

伊藤茶仏

那谷光郎

中島小石

大西八歩

石曾根民郎

布井白面

石井間柳

桜田久米

濱田松園

菊沢小松

逸見灯竿

清水白柳

德永雅美

新川博也

尼谷竹莊

水谷柳慶

弘津湖山

杉谷耕民

増田占

佐野史由

小沢喜葉

大鶴喜水

野本香月

小林文峰

龜山晴峯

山根白星

富岡淡舟

飯降白香

西辻竹青

飯野光

阿万柳

岸南柳

黄瀬美秋

福島鉄児

青木遊星

服部十九

長谷川三司

若林草右

大西迷窓

浜畑胡蝶

益形真女

山田永貞

山田一葉

山田善光

山田波

田村三林

下田清潮

る。新国劇の総帥として、三十八才を一
期に中耳炎がもとで死んで逝った一代の
名優沢田正二郎

何処かで囁子の声す耳の患^{わづら}。

の一句を辞世として、華々しく散った彼
は、滋費県大津市に生まれ、明治廿五年
五月呱呱の声を挙げたが、三才に父を先
立て、母と共に上京、中学から早大英文
科、坪内博士の文芸協会、帝劇、有楽座
と順当なるコースであつたけれども、大

正三年の「復活」に出演したのを最後に

劇団と分離し、やがて新国劇を組織して
新富座を借り受けて演劇して以来、失敗

に失敗を重ね、十一名の座員と部落ちの
己むなき南座興行も大失敗、大正九年の

明治座も散々の不入り等、幾多の苦難の
劇の道を歩まざるを得なかつたのであ

る。かてて加えて、現今なら問題にもな
らない、ほんとうに晴天の霹靂の象徴署

事件が起きたのである。象徴署事件と云
うのは、大正十二年八月廿九日夜の事、

公園劇場三階の青年部楽屋に於て、寿司
の大胆を車座に閉んでいところ、巡視

中の刑事に、賭博の現行犯と感ちがいさ
れて、一網打塵引致されて、同署から警

視庁へ移された九月一日、あの関東大震
災の其日、未曾有の物凄い轟音、焼野カ

原の帝都に、釈放された彼等一党四十七
名、かつての劇場の焼跡を見て「沢田は

死なす、新国劇なお健在」と幾多の難関

を超えて、只管、東京部の謝恩、慰安に
と日比谷の音楽堂に於ける野外劇は、十

月十七日以降の三日間、長唄界一流の特
別参加の厚意はもとより、天も味方する

か、快晴の青空、地震にも、劫火にも克
った不屈の精魂は、万余の観衆にアビー

ルされた彼、思い出深い日比谷音楽堂に
於ける彼の葬送に、二万を超ゆる弔問者

に、惜しまれた沢正、彼もまた、その芸
道一筋に生きた快男子だと思ふ。

ここに於いて私は思う。川柳も、かく
の如しである。句は、作句する人の環境

に左右される。作家の作品は、作家の環
境の描写でもある。その作家が、比較的

物質上の苦痛の多い時は、その作家の作
品は、光を発す。精神的な苦悩の作家の

作品は、何かを求める心、即ち、物心共
に、苦悶の人の作品は、後世に伝えられ

るべきものである。五郎も、沢正も、逆
境にあって、逆境から立ち上る時、彼の

社会に対する視点、物の感じ方、それは
根強いものであらねばならなかつたから
である。別の境地を見出す。私は川柳家
は、順らく、逆境にあつても、悲観すべ
きではない。寧ろ、よい句を生む為めの
訓練だと思ふべきではなからうかと思
ふ。過去に於ける川柳大家の作品が、
後世長く光を発ち、物心に、関えなが
ら、よく苦しんであれだけの句を後世に
伝えたものだとも思う。

本 田 恵 二 朗
松 川 柱 的
馬 場 夢 生
村 上 ゆ づ る
森 本 法 泉 子
小 池 し げ お
竹 内 圭 三
松 村 万 古
津 田 麦 太 楼
浜 野 奇 童
橋 本 幸 男
高 崎 雄 声
高 橋 操 子
藤 井 東 朗
永 田 素 身 郎
野 田 素 身 郎
永 藤 弥 平
神 谷 凡 九 郎
清 水 望 峰
川 端 鬼 醉
伊 木 村 十 悟 子
坂 田 東 洋 男
志 本 礼 司
不 二 田 一 三 夫
酒 井 ひ か 平
深 見 雅 堂
松 下 京 一 楼
津 秋 六 花
丸 川 初 甫
笹 野 旭 泉 子
新 岡 回 天 子
池 田 古 心
石 居 高 志
小 倉 へ と ち
早 川 清 生
武 部 若 菜
西 出 一 栄
平 井 清 子
平 井 平 子

阿 部 柳 太
西 田 柳 太
辻 岡 圭 浪
松 岡 恒 雄
中 松 辰 美
杉 本 立 美
安 部 迷 羊
野 口 迷 羊
児 島 与 呂 志
小 浜 牧 人
菱 田 満 秋
前 川 左 文 字
池 上 知 恵 美
平 尾 青 一 郎
西 尾 青 一 郎
橋 高 蕉 風 平
中 村 九 呂 平
多 田 九 呂 平
山 田 伊 三 男
宮 口 笛 生
石 坂 新 雪
城 坂 新 雪
西 川 吾 柳
梅 木 宗 一 晃
田 中 鮎 子
野 田 一 念
山 本 立 兒
林 本 立 兒
仲 本 立 兒
久 家 代 仕 男
本 多 柳 志
原 本 多 柳 志
大 谷 独 仙
江 谷 月 都
光 好 陽 谷
河 相 陽 谷
野 呂 鶴 汀
樋 口 舟 遊

高 野 む じ な
吉 本 一 子
山 本 一 子
杉 前 南 宗
建 沼 康 之 介
今 西 生 董
室 西 生 董
川 竹 松 風
内 海 敬 太
横 山 一 声
関 戸 宗 太 郎
高 山 涼 髪
安 平 次 弘 道
渡 辺 曉 童
井 田 実 男
高 橋 尚 史
浅 野 芳 朗

林 鳥 夢 虹
室 本 夢 虹
舟 木 千 尋
小 林 孤 呂 二
梶 谷 冬 生
伊 原 明 林
門 永 三 舟
工 藤 甲 光
榎 藤 紫 吉
高 津 徹 也
谷 沢 好 祐
田 中 鳥 雀
藤 村 貝 女
小 島 さ ぎ 子
河 井 庸 佑
植 村 客 遊 子
加 藤 繁 雄
森 下 受 論
平 沢 保 美 月
野 村 岬 輪
村 山 光 輪
中 谷 ハ ナ 子
木 山 遠 二
傍 島 静 馬
米 虫 一 乃 字
北 村 芳 三 歩
森 田 芳 三 歩
福 田 多 可 志
大 前 旭 童
村 上 旭 童
林 中 狂 男
魚 住 瀧 潮
石 倉 旅 風
竹 内 千 里
吉 原 紅 月
辻 原 白 子
高 野 む じ な

吉 本 一 子
山 本 一 子
杉 前 南 宗
建 沼 康 之 介
今 西 生 董
室 西 生 董
川 竹 松 風
内 海 敬 太
横 山 一 声
関 戸 宗 太 郎
高 山 涼 髪
安 平 次 弘 道
渡 辺 曉 童
井 田 実 男
高 橋 尚 史
浅 野 芳 朗

花月亭九里丸氏逝く

―新春句会の出席を約したが―



不二田 一三夫

昨年十二月二十四日のクリスマス・イブの日、大阪小ばなし会りの師走例会が千日前の自安寺で催された。

本社句会の新会場こそ、この小ばなし会りのホームグラウンドだったのである。そんなわけで九里丸氏は、新春から川維の句会へ出席することを非常にたのしみにしておられた。以前からも本社句会の出席を依頼していたが、足が不自由で階段を苦手とされていたからのびのびになっていたのである。

「一席やらせてもらいまっせ」とあれほどのしみにしていたのに、一月七日午後三時二分、急性肺炎のため阿倍野区の自宅で死去されてしまった。七十一才（明治24年10月10日生まれ）だった。

あの最後の師走例会でそばにいるボクに、「不二田ハン、わたいの川柳、だいぶ上手になりましたやろ」

と、新年号の近作柳傳にでてくる三句が非常に自信があったようだった。

ているが、後輩の面倒をよく見た人であつたらしい。

毎晩のようにデクデク歩く杖にささえられたわが身が口惜しかったようであつた。

「きつと句会へ寄せてもらいます。兼題はなんでもしたくないな」

一・一（かず・はじめ）氏が、自動車呼びに行くつも、氏は本社の兼題を考えていたようだった。ボクは氏のズボンのバンドをうしろから握り、吊すようにもち上げていたが、準巨人型の人だけに自動車来るまでにはボクの左腕がしびれきっていた。

「路郎先生からいただいた、ふるくとも僕には仁義礼智の句をときどき拝見しては心を洗っています」そんなことをききながら、一・一氏が呼んで来た自動車へ抱えるようにして乗せたが、

の句をときどき拝見しては心を洗っています」そんなことをききながら、一・一氏が呼んで来た自動車へ抱えるようにして乗せたが、

の句をときどき拝見しては心を洗っています」そんなことをききながら、一・一氏が呼んで来た自動車へ抱えるようにして乗せたが、

の句をときどき拝見しては心を洗っています」そんなことをききながら、一・一氏が呼んで来た自動車へ抱えるようにして乗せたが、

の句をときどき拝見しては心を洗っています」そんなことをききながら、一・一氏が呼んで来た自動車へ抱えるようにして乗せたが、

の句をときどき拝見しては心を洗っています」そんなことをききながら、一・一氏が呼んで来た自動車へ抱えるようにして乗せたが、

の句をときどき拝見しては心を洗っています」そんなことをききながら、一・一氏が呼んで来た自動車へ抱えるようにして乗せたが、

の句をときどき拝見しては心を洗っています」そんなことをききながら、一・一氏が呼んで来た自動車へ抱えるようにして乗せたが、

の句をときどき拝見しては心を洗っています」そんなことをききながら、一・一氏が呼んで来た自動車へ抱えるようにして乗せたが、

の句をときどき拝見しては心を洗っています」そんなことをききながら、一・一氏が呼んで来た自動車へ抱えるようにして乗せたが、

の句をときどき拝見しては心を洗っています」そんなことをききながら、一・一氏が呼んで来た自動車へ抱えるようにして乗せたが、

の句をときどき拝見しては心を洗っています」そんなことをききながら、一・一氏が呼んで来た自動車へ抱えるようにして乗せたが、

の句をときどき拝見しては心を洗っています」そんなことをききながら、一・一氏が呼んで来た自動車へ抱えるようにして乗せたが、

の句をときどき拝見しては心を洗っています」そんなことをききながら、一・一氏が呼んで来た自動車へ抱えるようにして乗せたが、

これが最後になってしまった。

郵便の遅配を見越して秋に年賀状をいただいたが、元日にもやはり正式の賀状がきた。その日の数多いバガキの中に、いつもより乱暴な筆蹟で、

「十三日は急中につき出席できません。残念、と書いてあった。あとでわかったことだが十二月二十四日に句会出席を約して、その翌々日の二十六日に奥様が亡くなられたのである。

「年末に皆さんに迷惑をかけてはイカン」

と、あまり人には知らせなかつたようであつた。奥様を亡くされたことなどでも、ボク如き人間との約束のために不自由の手でバガキを年末に出されたのであつた。奥様の死に大きくショックを受けたことが氏の生命の灯を早く消したともいわれている。

新春句会でお会いしたとき不朽洞会へ推薦するつもりでいたのに惜しい人を亡くしてしまった。

一月九日午前十時から東住吉区山阪町の法楽寺で告別式が盛大におこなわれたが、九里丸氏の希望でハヤシ方十五人が首にじゅうずを巻いて三味線やカネ、タイコかなで「天神はやし」の音曲入りという、しめやかなうちにも名物男らしい花やかさがあつた。

渡辺力蔵が本名であるが、引退されたとき「朝吉」という名にされた。小ばなし会でも十月例会では引退記念に兼題「朝」を九里丸氏におくつたものである。

「朝」とは、生まれ月日の十月十日を組み合わせると「朝」という字になるが、九里丸という人は、よく文字と戯れた人だった。

ストの赤旗がヘンボン蛭蛙（ひるがえる）時代——というように。

新春句会でお会いしたとき不朽洞会へ推薦するつもりでいたのに惜しい人を亡くしてしまった。

一月九日午前十時から東住吉区山阪町の法楽寺で告別式が盛大におこなわれたが、九里丸氏の希望でハヤシ方十五人が首にじゅうずを巻いて三味線やカネ、タイコかなで「天神はやし」の音曲入りという、しめやかなうちにも名物男らしい花やかさがあつた。

新春句会でお会いしたとき不朽洞会へ推薦するつもりでいたのに惜しい人を亡くしてしまった。

一月九日午前十時から東住吉区山阪町の法楽寺で告別式が盛大におこなわれたが、九里丸氏の希望でハヤシ方十五人が首にじゅうずを巻いて三味線やカネ、タイコかなで「天神はやし」の音曲入りという、しめやかなうちにも名物男らしい花やかさがあつた。

新春句会でお会いしたとき不朽洞会へ推薦するつもりでいたのに惜しい人を亡くしてしまった。

一月九日午前十時から東住吉区山阪町の法楽寺で告別式が盛大におこなわれたが、九里丸氏の希望でハヤシ方十五人が首にじゅうずを巻いて三味線やカネ、タイコかなで「天神はやし」の音曲入りという、しめやかなうちにも名物男らしい花やかさがあつた。

新春句会でお会いしたとき不朽洞会へ推薦するつもりでいたのに惜しい人を亡くしてしまった。

一月九日午前十時から東住吉区山阪町の法楽寺で告別式が盛大におこなわれたが、九里丸氏の希望でハヤシ方十五人が首にじゅうずを巻いて三味線やカネ、タイコかなで「天神はやし」の音曲入りという、しめやかなうちにも名物男らしい花やかさがあつた。

新春句会でお会いしたとき不朽洞会へ推薦するつもりでいたのに惜しい人を亡くしてしまった。

金 泥 集

麻生 葎 乃 選

「あみだくじ」

あみだくじ 南無阿弥陀仏とチヨクてひき

あみだくじ 辛い煙草の銭はたき

あみだくじ 武運運なく辛買いに

民主主義社長も入るあみだくじ

あみだくじ 課長はボンと別に出し

ハンサムが買いにゆく役あみだくじ

月給は午後あみだくじ廻って来

お三時のデスクは今日もあみだくじ

この辺でお茶にしよう

あみだくじ 言ひ出し平がカモになり

あみだくじ 今日のはたらふくたで食い

あみだくじ だのまんじゆが胃につかえ

云いだしが一番出したあみだくじ

末の子のするさてもめるあみだくじ

ビジネス中ねむけをさますあみだくじ

女子寮へ焼芋はこぶあみだくじ

主権者は貧乏くじのあみだくじ

あみだくじ 母大袈裟に口惜がり

次回題「義理」 切二月末日

いのちある句を創れ



投稿規定

▼用紙は原稿用紙▼文字は正
確▼締切毎月十五日▼投稿先
本社宛

新春句会 (大阪市)

1月13日 午後6時
会場——千日前自安寺

「虎」歳である一九六二年の「スタート」を切る新春句会は、ことしから千日前の自安寺で開催されることになった。

句箋と取り組むその「横顔」にも川柳への情熱を見せ「小刻み」ながら一句一句と生命ある句を積み上げていくのだ。

会場のあたたかさは、どんな「寒むがり」でも冬を忘れた顔になり、4Bをもつ手も火鉢無用の「手袋」をしている温さである。新春句会に恒年おもうことが、川柳年令はイゼンだんだん老いていくようで、なんとか若い人を誘って川柳の「年頃」を若返えらせたものだ。

まず不朽洞会理事長中島生々庵博士が不朽洞会を代表して、路郎、蓼乃両先生に新年のあいさつをされた。

路郎主幹は柳話の中で田中辰二氏夫人美喜子女史の随筆の一部「おばあちゃん

に捧ぐ」から、世のおばあちゃんよ、若返えれと、ユーモアたっぷり語られ、きょうご出席の石井黙平氏は八十一歳の高令でなおも川柳にとけこんでおられる。だが「とけこむ」ということは命がけでかからねばならないと、力をこめて結ばれた。

八十一歳のご高令で句会へ出席するその健康と情熱には「柳魂」のたくましさを感じられたのである。

36年度の不朽洞賞カップは不二田一三夫氏が水久保持することになり、これで三年連続が達成したわけである。

全出席者の筆頭は傍島静馬氏で実に八年間連続出席という大記録である。

つづいて六年の金井文秋氏、五年の西田柳宏子氏、河井庸佑氏、不二田一三夫氏、四年の樋口舟遊氏、三年の山川阿茶氏、橋高薫風子氏は森下愛論氏、榎本藍児氏の十柳人が、路郎主幹の短冊と賞状を手に入れた。

さて、37年度の第一句は菊田いさむ氏選の専翁氏の入選句から高々と披露された。路郎主幹選の最後の一句、辻圭水氏の佳句まで二百二十句が記録されたが、ことしから各天位の句を、さらに主幹が選をされ、天位の天に不朽洞賞を贈られることになった。

きょうのこの栄冠は辻圭水氏が堂々にぎられ、幸先きのよいスタートをきられ

たのである。

(F)

出席者—路郎・黙平・圭水・和男・圭井堂・梅志・一三夫・文秋・清風・白柳・いさむ・万楽・すゝむ・十悟・瑞歩・三司・専翁・案香・南宗・柳宏子・夢虹・薫風子・庸佑・静馬・古方・たねお・菁風・八郎・生々庵・舟遊・堰子・梅里・一栄・清子・女・生麗・野添路・榮・阿茶・貴山・東天紅・雄声・計光・いわを・恒明・愛論・季費・宏子・豊力

兼題「横顔」 麻生路郎選

裏切った横顔つんとそむけられ 晃男
横顔は非の打ち処ないのだが 八九寸
横顔が綺麗といえはむくれ出し 照児
横顔のこれが俺かと瘦せている 牧人
垢ぬけのした横顔で親を捨て 梅志
横顔へキッスをしなほに振れ 梅志
横顔の冷たさへつい言いそびれ どんたく
横顔の淋しいところが好きになり 紫香
横顔を見事とらえたシルエット すゝむ
子規の写真一枚きりか横ばかり 瑞歩
横顔のズラリと酔うた終電車 萬楽
発車ベル横顔のまま涙ぐみ 生々庵
嘘は申しませんと言う首相のフロイデル 梅里
横顔に小泉八雲生きている 薫風子
横顔でおよその年が解りかけ 菁風
横顔も起伏あままり目立たない 静馬
横顔をうまくとらえたカメラマン 菁風
横顔のまんま注射をしてもらい いさむ

兼題「虎」 清水白柳選

子の作文虎でない日のパパが好き 一鶴
餅花の下で小虎は春のゆめ 三司
頃合いのトラに夫をしてねだり 正一
大虎は千里どころかのびちま 瑞歩
しんがりの幹事がトラに肩をかし 文秋
虎の皮敷く親方の長火鉢 萬楽
政治家も昼間は狸夜は虎 清風
猫に似た虎が舞いこむお元日 どんたく
デパートへ出て虎思うこと多し 三司
清正に刺された虎は強くみえ 生々庵
駅前の宿にもあった虎の軸 一鶴
虎の威をかりて仕末の悪いダニ 紫香
まず虎を見てから動物園回り 紫香
虎の巻語手のところがよう汚これ 東天紅
おばあちゃんハリの虎の首に似る 恒明
ジャングルを知らず虎の仔が育ち 夢虹
メガトンに竜虎相うつ二大国 圭井堂
虎の絵にとらえられ仮名つけておき 一栄
虎の尾を踏む金鯉も十二月 雄声

金詰り虎穴にはいる男が欲し 牧人
未亡人虎の皮には弱らされ 梅志
虎の首縦には振れぬ定めなり 萬楽
張り子でも虎だ猫にはない威厳 文秋
動物園の虎は雀が羨まし 生々庵
しもたのくせに竜虎と書いた額 梅志
虎の尾を踏むスリルにあこがれる 柳宏子
鼠走って神農さんの虎がゆれ 三司

兼題「年頃」 西尾 采選

年頃をそのあか切れに見染められ 一三夫
哲学が年頃であるのを忘れさせ 甫佑
年頃へ青年団のいい話題 紫香
年頃の疲れを知らぬ遊びよう 青風
お年頃世間なみの世辞を聞き 女
プレゼント年頃らしいものを獲り 白柳
年頃は獲ける母をうるさがり 阿茶
年頃の娘が一人居て座がはずみ 柳宏子
私の年頃に二児の母だった母 夢虹
年頃は空いた席にも腰掛けず 和郎
年頃の唄阿呆らしい曲ながら 白柳
年頃の声がいつまで交換手 萬楽
年頃の艶はクリームだけで済み 貴山
スキー服派手に年頃匂わせる 梅志
年頃へ親馬鹿振りを笑うとれず 恒明
年頃を芸一筋へ嫁きおくれ 一三夫
年頃の日記に嘘のない育ち 舟遊
年頃はイエスカノーをあせるなり 静馬
自分から言う年頃は自嘲めき 采

兼題「小刻み」 後藤 梅志選

春近し小刻みながら熱さがり 光道
小刻みに貯めてお医者へもて行き 季賛
小刻みに退職金が孫に消え 生薑
時間厳守へタラシ小刻みにしなけず 牧人
小刻みに遙れる汽船で寝てしまい 雪峰
小刻みに生むよりふた子生んでおき どんたく
小刻みのいやみ姑まだほけず 野迷路
小刻みに歩く女の背がまるい 白柳
小刻みに駆ける師走の空 風 梅里
小刻みに生命へやすりかけており 阿茶
七日がゆ七草刻む音で明け 三司
小刻みに歩いて年始から戻り 紫香
退職金余生かぞえて小刻みに たねお
木菜屋刻みながらの水加減 采
小刻みにふるう優勝盆を受け 貴山
小刻みに日本選手追いつが 瑞歩
小刻みに今日も生死の分け目なり 専翁
小刻みに孫へ土産を分けて出し 夢虹
小刻みなこんなことでもよろこばれ 古方
小刻みに歩けば女らしゅう見え 清子
小刻みに番付の字が太くなり 十悟
小刻みの自供に刑事へこたれる 圭井堂
小刻みの餅を聞いて寝つかれず 萬楽
小刻みに歩けば春の風動き いわを
小刻みにまのびのしてる意見出る 圭井堂
小刻みに肩がふるえている背負 柳宏子
小刻みの無心上手に持つて去に 圭井堂
小刻みに根よく貸した金を取り 文秋

席題「スタート」 松江 梅里選

十二月男が刻む塩見布 三司
小刻みに打つ小づつみに鬼となり 夢虹
小刻みにする七草の母の唄 恒明
小刻みに手当を貰い囲われる 梅里
小刻みで返す誠意をはめてくれ 正一
小刻みでよし電化の品が増え いさむ
団交で小刻みながらせり上げる 甫佑
ベースアップ小刻みながら有難し 黙平
小刻みに儲けた金だから貯まり 文秋
小刻みな金へ仕事は大きすぎ 梅志
会議一人でスタートに戻すボス 八九寸
スタートの二人花束抱いて発つ 牧人
スタートの誓いを曲げず共稼ぎ 萬楽
スタートから二人三脚けつますき 生薑
スタートでつまずき釜ヶ崎に住み 一三夫
スタートがよかつた株の一と儲け 萬楽
スタートは四月選挙はもう盛り 白柳
就職のきまつた朝のさわやかさ 清子
スタートの時期をコーチと話し合い 青風
スタートはよしシヤンソレイにころぶ 舟遊
スタートを誤り夢を追いつづけ いわを
スタートも好し運もつき今日と成り 喜仙
スタートから二番について離れない 雄声
スタートを派手にくす玉花輪たの 静馬
日本の策はスタートから飛び出さず 十悟
スタートが派手すぎ引込みつかずなり 采
スタートの実存主義でゴーサイン 生々庵
専翁

昭和36年度

全出席者

(敬称略)

天位受賞者

傍島静馬(八年間) 金井文秋(六年間) 西田柳宏子・河井甫佑・不二田一三夫(五年間) 樋口舟遊(四年間) 山川阿茶・橋高薫風子(三年間) 森下愛論・榎本藤児

不朽洞賞杯受賞者

①一三夫②水客③正一④鶴汀・南宗・青風・摩太郎・静馬(永久保持・不二田一三夫)

スタートの太鼓橋にも霜が下り 梅志
 リーダーが倒れスタートまっつかせ 南宗
 駆け落ちがスタートだと子に言えず 文秋
 スタートは几帳面なる日記帳 萬葉
 スタートへ雑音よりプロへ入り 阿茶
 スタートはよし日章旗上りそう 和郎
 スタートに早やペダルは敵をのみ 十悟
 更生のスタート恩師と母に護られ 雄声
 人生のスタート産声小さ過ぎ 貴山
 ポイントはスタートだった策を悔い 十悟
 更生のスタート靴みがきから始め 夢虹
 スタートはトッパでバトン受けこそ 瑞歩
 スタートは墓場へつづくハネムーン 一三夫
 自信あるスタート大きな深呼吸 古方
 スタートは夫婦で押した屋台店 三司
 スタートへ金はどうやとこきくる 古方
 スタートのデブ嬉しいハネムーン 一栄
 スタートが大事と祝辞達意せず 圭井堂
 スタートがよかった話を話とき 紫香
 スタートも荒れて天皇杯らしく 圭井堂
 スタートは尻からゴレは鼻で抜き たねお
 付添の要るスタートの線 乱る 黙平
 スタートの梅を易者の灯にさらし 三司
 スタートからついでまたと言う謙虚 梅里
 席題「寒むがり」 金泉万葉選

寒むがりのくせに薄着の腰の線 庸佑
 栄養が足っているのに寒むがり屋 白柳
 はいはいくせな炬燵へまだすくみ 生薑
 仰山に寒むがる芸者置炬燵 榮
 寒むがりが冬の金魚を寒むがって 夢虹
 目だけを出して寒むがりの息白し 黙平
 スラッパス寒むがりの娘に寒く見え 白柳
 寒むがりが寒中水泳見に出かけ 貴山
 寒むがりの子が勉強にとじこもり 十悟
 寒むがりの意地張って張って薄着する いさむ
 ストープをたいているのに火鉢抱き 清子
 恋知って寒むがりスキーにう出かけ 阿茶
 寒むがりが南洋へ行つて見とらなり 一栄
 寒むがりのくせにビールが好きと言う すむむ
 寒むがりの暑がり妻言い添える 榮
 寒むがり屋土用に生まれたせいにする 瑞歩
 風の子やないかと炬燵から叱かり 榮
 オーバーを焦がして帰る寒むがり屋 雄声
 寒むがりが来て寒むがりを寒むがらせ 三司
 たまに水で洗い寒むがり得意なり 舟遊
 寒むがりの夜勤へ寝巻き温める 阿茶
 掘りこたつ電気座蒲団までもして 静馬
 寒むがりの背中ドシンとどやされる 梅志
 寒むがりへパチンコといと遊びどこ 清風
 寒むがりを笑うた昔は若かった 柳宏子
 寒むがりが猫を尻目に勤めに出 一三夫
 寒むがりを看板にして尻を据え 十悟
 寒むがりが蒲団の重さと言わず 生々庵
 寒むがりと知つております炭をつぎ 恒明
 よせ鍋にしよう寒むがりの二人 萬葉

席題「手袋」 菊田いさむ

柏子木のように手袋首にかけ 専翁
 手袋の位置も花婿直される 紫香
 手袋の主は誰だろう踏まれてい 雄声
 紐つけたまま手袋落して来 圭井堂
 煙草屋の軒手袋がぶら下り 三司
 手袋が今年も左だけ残り 専翁
 手袋のままで別れの握手する 圭水
 もう米寿手袋のヒモ首にかけ 一三夫
 今日の手袋移した軍手油じみ 清子
 デートの愉しさ手袋も置き忘れ 柳宏子
 手袋を忘れて帰る梯子酒 南宗
 純白の手袋心まで澄んで見え 計光
 振るものが無く手袋を振って見せ 三司

手袋の片方落ちて霜の道 榮
 線路傍き手袋不気味に落ちて 柳宏子
 手袋の甲で水はなふくも 齡生薑
 作業手袋も新年という白さ 柳宏子
 写真屋の目に新郎の手袋ふるえ 清子
 先輩の駅長白手袋が眼に目立ち 雄声
 手袋もぬがず勝手な神頼み 和郎
 手袋に雪の刺しゅうがある若さ 一三夫
 ストープに手袋もはず山の小屋 紫香
 義手の手袋で異国の丘歌う 梅里
 手袋を脱がせて美人と握手をし 瑞歩
 キザにダイヤすかし手袋膝に組み 生々庵
 吊皮の赤い手袋がよく喋べり いさむ
 (雷清記)

食品と科学

食品と原資材・機械・包装の総合誌

2月号発売中

180円(〒18円)

特集

アイスクリームの現状
 アイスクリームと栄養食
 アイスクリームの衛生管理
 アイスクリームの添加物

講座

食品工場の衛生 ⑨

食品工業における品質管理

- ◇ 海外ニュース ◇ 特許ニュース
- ◇ 意匠ニュース ◇ 商標ニュース

〔展望台〕主食・罐詰・菓子・飲料・添加物

大阪 市北 区6-4
 電話 9373

食品と科学社

大阪 6702番

川雛
にしなり支部句会 (大阪市)

後藤梅志選

年末の街ゼンザイがはしくなり 千尋
寒鰯の釣れそうでない頬かむり 舟遊
電線のタコ雨風で骨ばかり 恒太郎
お早ようさん海をへだてて淡路島 牧人
急ブレーキどこで赤子泣き始め 菁風
ブレーキの罵声を浴びた物思い 運
ブレーキを踏んでも若ささうない すゝむ
曾根崎署くるまの渦を見て暮し 生薑
引き裂いた馬券が風の渦に舞い 良
やわらかに蒔絵の波も渦を巻き 薫風子
なりわいの渦に自分の小さな影 葉平
年末というに冷蔵庫が据わり 梅志

川雛
玉造支部句会 (大阪市)

西出一栄報

妻知るを押し合つて乗るラッシュニアワー 水京
くじ運は強いが一人で暮して居 正一
落選のビラ刺ぐ人もなく古ぼけ 義介
雑沓のムードが好きでただ歩き 一栄
年の瀬を雑沓に見る人間像 文秋
一人座し回顧幼き日を追うて 呂人
目をまた回顧へ母が出ては消え 清子
一年の回顧今年も無事でした 六竜子
柳宏子

川雛
阿倍野支部句会 (大阪市)

金井文秋報

鮮花の下で特賞当てた声 一三夫
ゆきすりの瞳と瞳それから溶け初め 十悟
ゆきすりに笑わしてゆくデッド屋 双葉
ゆきすりの恋の別れがあつたなし 牧人
ゆきすりの話題にされて気が疲れ 水客
いつの間に僕へ小言が廻って来 唯義
風向きが荒く云う事引込める 喜仙

風向きがどうやらあやし眼でしらせ 阿茶
風向きで今日は天ぷら屋がにおい 白柳
追風をよって歩いてサンドマン 清人
かせ向きの直つたとこ酒が出る 梅里
たたられる覚えはないが祭つとく 良
アルバイトお酒の味も覚えて来 清風
二次会へ金のあつたのを取り逃がし 一三夫
知らぬふして手ほどきを聞くも趣味 文秋
独学の手ほどきだけで病みつつけ 葉光
手ほどきをしただけですと下座に居 水客

川雛
淀川支部句会 (大阪市)

木村水洞選

お隣りのステレオ我が家までゆすり 一鶴
隣りから茶碗飛び込む裏長屋 東洋男
団結の赤旗の下社を潰し 三十郎
口銭のうすい商品だけさばけ 水洞

川雛
ハワイ支部句会 (ハワイ)

築山快夢起報

長寿法眼鏡を拭いて読む気なり 銀水
借金に殺しちや取らぬと度胸きめ 平八郎
若いとき今の度胸があつたなら 紅茶
色眼鏡かけて世間をこまかす気 泉水
幸運を度胸がなくて取り逃し あき坊
強意見煙草で聞いているよい度胸 万理歩
度胸据え喧嘩も派手な態 怠期 エス子
一度より二度と度胸のつく舞台 紅溪
ロマンスも知らず度胸で五十年 固防
坐つて度胸夫婦とも見られ 笑潮
知らぬ間に老眼鏡の世話になり 美屋
眼鏡を今は忘れぬ老夫婦 玉屋
落第生度胸一つで世を渡り 美津子
うたた寝をされて眼鏡が淋しがり 内海
思い出の写真に眼鏡かけ直し 弦月
文なしの男度胸でビルが建ち 梓山
お下がりの眼鏡で老妻事が足り 須磨子
勇み肌暗度胸をはめられる 柳葉

あの度胸買われて今じやい身分 カロ女
四面楚歌男度胸を据えて立ち 浅太
若者の度胸おそれる老婆心 細香
白い歯を見せず度胸で世を渡り 曉舟
マネービル思案の外に要る度胸 快夢起
老眼鏡かけて世間の裏も見え 沈丁花
サラリーマン度胸あるのが旗をあげ 旋風

川雛
京都支部句会 (京都市)

田中鳥雀報

逢いたいとお金の切れ目におわせる 生薑
デートする電話を母は近く聞き 喜由
手を膝に又逢えた日の喫茶店 司郎
鼻孔より火となる息をととのえる 藤
薬局の長講一席女王蜂 紫蘭
避妊薬此の薬局も客が居る 和三郎
遠くへ乾いた運河があつて恋物語 枯粒
海の向うの話を聞いている冬 あきら
浩宮今日のきげんは振らせない 紅寿

川雛
木次支部句会 (島根県)

藤井明朗報

上役をとどけて酔いが深うなり 柳心児
計画も持ち越してする年の暮 清泉
停年が近し上役低姿勢 明朗
上役に注いでそれから言い出す気 清夢
上役の痛どころへ念を押し 隆昭
倍増の掛旗だけに暮れた年 栄治
女連れ着かざって行く婦人会 明暗
忘れ物取りにゆけない捨ぜりふ 英城
更年期の事にふれて女連れ 佳仙
女連れ男小さくすれ違い あきお
酒飲めば酔う上役であつてよし 可明
上役の名刺で追加取りにやり 古坊

川雛
弓削支部句会 (岡山県)

直原七面山選

電化完了妻にようめきたいレジャー 生薑
台風がすめば交通事故と火事 杏郎
堀り炬燵が使いの足をにぶる 仙人坊
ボーナスを待つたように歳の市 遠山
大小に分けて柿の値たかされる 知恵美
退院の明日へ嬉しい胃化粧 竜平
夜勤の子帰らずネズミの走る音 たつよ
どの曲も同じ手ぶりで子の踊り 松録
ビルずらり並んで君の窓はどこ 賤女
米ソの差込と人間程違い 三四郎
電化して煙突不要となる厨 すみ子
老らくの二人が嫁の品定め なみ子
大海右に左に金が消え 崇世
紹介へ早速握手求める娘 七面山

川雛
備前支部句会 (岡山県)

横山一声報

真実を時効になつた頃話 東岸
年の暮真実よりも金が欲し 宗義
真実に生きたを息子に批判され 芳月
信じたくない真実へき返す 賤女
真実が自殺未遂で認められ 一声
真実に生きたれば貧がつきまとい あやめ
東京が初心な心をとまどわせ 久米雄
新妻が初心な手付きでお酌する 竜泉
初心な嫁あなたが喉にひつかり 胡凡
なんべんも鏡を見たい髪の出米 伊久野
自惚れは鏡が悪いせいにする 秋月
やきもちをやかせて見たい嘘を言い 八千代
嘘のない自然梅には梅が咲き 千代
他人さまに迷惑かける嘘言えず 舞次
経済も月と同じくまなならず 三六
まんなかへ乗せてもらったお便 称子
まんなかへ出てかくし芸おどらせ 博

川雛
米子支部句会 (米子市)

小西雄々報

大西迷窓選

綿のぞく座布団かえし花かるた
古布団綿の出た方は裏に干し
新嫁の仕立てし綿の布団着て
老体の綿入れて過去を考える
これだけでいくらになると手内職
言訳へ妻内職の手を止めず
内職で貧しく積んだ学資金
内職の背程積んで米一升
生甲斐を子に托しつつ手内職
溜息のときとき交る手内職
内職の母の返事のあいまいさ
胎動のたびに内職力湧く
内職の妻の素顔がもつ家計
くしきみて妻内職の夜を更かし
斗争も終幕告げて手を握り
あれ程の事件終幕あつけないし
終幕のつかぬ米ソの思想職
終幕に近くドラムに熱が入り
終幕で西と東に別れる二人
終幕はサヨウナホーマで物足らず
フイナレスタウも皆んな出て
終幕の名瀬觀客立ちやらず
終幕は立派につけてゆけそうだ

正光
柏子
凡夫
醉蜜
伸
鯨洋
和香春
幸泉
論愚
瑞利
利子
百日紅
吞洋
俊一郎
木精
古城
嚴道
青蛙
雪枝
波浪
遊子
曲汀
松竜

終幕はまだまだ先だと鐘をふり
終幕になって恋人顔を出し
終幕を告げるジンタの音わびし
これぎりのキッス少々長うなり
終幕はふたが皆んなが気に入ら
はつたりを利かせて弁慶陸奥へおち
終幕は見えぬお座敷から電話
終幕のベル痛い程のかぶりつき
いつまでも居たい席だにも終幕
終幕も近くとり出すコンパクト
またいかん終幕近い年の瀬に
金を出す会の終幕長くなり
終幕の腹立てただけ無駄となり
過去に似た終幕老妻の手を握り
迷窓

久江
千佐子
紅海
砂丘
吹雪
美知
博理
窓花
雪峯
喜楽
水源
水月
松景
勝景
迷窓

川維大鉄局支部

植村客遊子報

片えくは恋には触れずを噛み
京の街からネオンが消えた大文字
アルバムのえくは悪女のなかにいる
学芸会その他大勢の子にエクボ
消えたネオンが極にも似たる 駢を発ち
碀子磨くその中にあるネオンの灯
新米の水加減まで書いて来る
親ゆずりのえくはかわいい子に育ち
落ちぶれて人情痛い程感んじ
人情が下着に泌みてるさいがい地
人情に脆いところを当にされ
えくはからうわさの人がすぐわかり
その人とおなじところにある笑窪
金のことかと煎茶を入れかえる

初重 杜的 賀人 卯門 万的 政一 惠重 桂風 美由起 甲峰 白溪子 千重 客遊子 水客

内海敬太報

月見れば振れたあの夜思いたす 健太郎
カレー食うだけのメニューをもて遊び 春 己
月見てもおセンチになれぬ世と化せり 宇 彦

台風一過無言薄情なお月さん
月を見るすすきの裏はモダンアパート
食堂の電話デイトに使われる
食堂の花一輪が人を呼び
ノーマネー食堂側を横目を通り
お月見は当店でと奈良の宿
案内
三知
草風
敬太
敬三
敬介
案山子

南海電鉄川柳会（大阪市）

辻圭水報

[illegible]

橋本幸男報

ニユートロッドみんな月賦とはみえず
面会に下駄履きのまま作家来る
面会に来て看護婦に惚れられる
雪だるま式月賦だんだんふれて来
同情が時間外でも逢わせる 気
狼に見えて 異性に恵れず
共学に異性であることを忘れかけ
ハイテン 異性の手紙見せ歩き
異性への手前無理した金が消え
人妻に電話の時は念をおし

落男 幸男 愛諭 風仙源 竹莊 夏生 春雄 草右 没食子 竹青

杏林川柳会（大阪市）

中島生々庵報
五十六
低氣圧出迎えもなく靴をぬぎ
出迎へのレイを掛け一寸でれ
出迎えはらぬと立つとき強気なり
刑終えた出迎え母がただ一人
二時間も待つて御通過のあつたなし
未知の土地出迎えだけを頼りにし
外人を出迎えウンもスンも出ず
盛大な出迎えこれもP・R
野添路
瑞川

コクヨ川柳会（大阪市）

たすけ
只酒を飲むなと大学で教えられ
へエーさよかそんな大学おましたん
新任の検事の表札白くさえ
表札に愛犬の外はみな並べ
押し売り見て先手うっ力を掛け
筆太の寓にか弱い女居て
川口理休報
留 龜 義 昭 理
鈍 心 広 一 休
堀文化祭川柳会(堀市)

堺文化祭川柳会（堺市）

ダイヤルのこどもニキビの頃の歌
八木摩太郎報

準場所と言つたけな取りこぼし
煙草屋も地名の知らぬ里立地
詮議立てすれば上座で咳がする
鈴振つて巫女一と役を舞い納め

春翠
貴山
正一
東天紅
夢遊

味よし
T E L 770-147

酌よし
千日前大劇裏
T E L 632710

梅里の店
大萬

★大万川柳(第百三十二回)を募る
兼題「コレクション」 路郎先生漢
締切、二月十五日 五句以内
発表、二月廿日 (店内掲示)
投句先 阿倍野区松崎町三ノ二

柳樽室

路郎生



★新春早々賀状
ありがとう。い
つも云うことだ
が、賀正だけで
は何んとなく味
気ない。たとえ
一、二行でも何
か云うてもらえ
ると、一枚一枚
にその人がしの
べてゆかいだ。
写真もいいし、
家族連名も親し
みが深いもの
だ。いただいた中で、一番有名な
は吉川英治さんだった。忌中の方
はなんとなくシユヅとなる。選

学習当てるのはありがたい気がしない。しかし知人はこの限りではない。毎年キンキンと下さる方にはアタマが下がる。私はこしは五百枚ほど出せないのが出来た。いただいたにお返しに出来なかつたのが二百枚ほどであった。第二回目の印刷も松の内を過ぎては気の抜けたビールの感じがせないでもないで、誌上のご挨拶でゆるしてもらふことにした。

★新年号では女流作家の西出一栄さんの「私もトラになりたい」が一番すばらしくてうれしかった。
★一月十三日に感じのいい新会場で句会を開いた。旧冬高座から華々しく隠退された九里丸さんが、十分間でもいから喋べらして欲しいとのことだったので高座を降りそいた淋びしい心柄を察して、よからうと云うことになっていた

に、七日の午后三時にはもう幽明境を異にされていた。その時間には芸文協会で旭堂南陵さんと九里丸さんの話をしていたのだった。人間の寿命はどわからぬものはないと思つた。
去年は昔の同僚風見章君が亡くなるし、ことにしつて九里丸さんの外に、飲仲間だった刀根山の病院長の渡辺三郎医師が亡くなった。近火の感が深い。

▼ペンの散歩▲

▼なにもかもシユンとするのが二月である。そんなときにウンと力を入れたのがこの二月号だ。
▼塚越迷亭氏に快筆をふるっていただいた。これからもドシドシ登場ねがうつもりである。毎号かかさず執筆たまわっている富士野鞍馬氏や、東野大八氏には、ただ頭が下がるのみ。



お芽出度う会

路郎先生ご夫妻の長寿を祝う恒例のおめでとう会は、一月一日午後四時から南区三休橋南詰中島小児科診療院の生々庵居で開催された。朝からの雨で出足は遅かったが、定刻過ぎ路郎・夢乃御夫妻をはじめ、春果・栗・文蝶・梅里・恒明・紫香・古方の諸氏が相ついで出席されたが、本年は案内の電話や電報の行き違いで顔を見せられなかった。一同席につくと新年の挨拶が交され、生々庵・小石ご夫妻のお心尽しのおせち料理に属蘇一巡する頃、讃嘯

さは次第にはぐれて和やかな雰囲気になって行った。先ず南地の舞妓玉葉さんの「松の緑」に次いで生々庵氏が「白扇」を、夢乃女史・小石さんが「梅の栄」、「惚れて通えば」、「黒髪」などを相次いで舞われ一同歓を尽くした後、路郎・夢乃両先生の健康を祝福して乾杯、八時過ぎ散会した。(薫風子記)

—カット写真は路郎先生夫妻—

▼年ごとにふえていく新しい作家群のために、北川春葉氏と清水白柳氏に「川柳に強くなる本」をご執筆ねがった。
▼二月号の原稿は、師走や新春のなかで書いていただくだけに、そのお骨折りに対し心からお礼申し上げます。
▼一月七日に舞踊家の石井漢氏と漫談家の花月亭九里丸氏が死去された。石井氏はドモリだった。九里丸氏は舌が短かった。石井氏は自らそのドモリを矯正したが、九里丸氏の舌は長くなかった。舌を二枚もたなかつたことがあの人気をよんだのであろう。

▼坂本九の「上を向いて歩こう」がヒットしたが、自分の自動車でケガをした。洋の東西を問わず、人気者の自動車事故は相変わらずあとを絶たない。乗ったら「前を向いて走ろう」
▼朝潮がとうとう引退した。實力の世界の宿命とはいえ気の毒なことだ。文学の世界では過去の業績だけで「横綱」を張っていきけるようだが、石原慎太郎ならずとも、ちょっとモノ言ひをつけたい。
▼遅配に勝つため編集を早くかかることになりました。たとえば四月号は二月中にはほとんど編集完了にしますから、切日を厳守ねがいます。(一三夫)

社 告

社の電話の局番(67)が二月四日から(671)に変わりますからお含み下さい。番号は従来通6081です。

川柳雑誌社

造句会・10日(土)、六時、題、冬山・余韻・新韻・所、市電玉造電停南百米大阪信用金庫、★明和研究句会・11日(日)一時、題、バランス・希望・椿、所、阪神電車鳴尾駅東南二百米鳴尾公民館、★南海電鉄句会・15日(木)六時半、題、脱線・高飛車・寒がり、所、難波高架下親和クラブ、★にしなり句会・18日(日)六時、題、なだれ・梅・鬼、所、玉出新町通り一ノ一後藤梅志居、★阿倍野句会・20日(火)七時、題、寄り道・甘党・荷物・赤字、所、阿倍野区松峰町三ノ一〇割烹大万、★かがみ句会・2日(金)夜、題、地下鉄・調停・口車・誤算・苦笑、所、池田古心居、★宇部句会・4日(日)一時、題、体質・射る・スイッチ・雪崩、所、津秋六花居、★みなと句会・16日(月)五時半、題、スター・パン・夢、所、鷹取国鉄診療所、★京都句会・16日(金)夕、題、凝視・美徳・金粉、所、四条錦手沖源寺

強力 ローヤル・ゼリー 製剤

活力を高める

強精と長生への天然の強壯効果



日本新薬株式会社

アヒ

正式名 アピフォルテイル

親
ごころ
子心

一川柳雜誌の川柳塔及び近作柳樽の中から観ごころ子心を詠った秀句を多年に亘って根気よく拾ひ蒐めたのが本書である。登載された柳人三百余名、集句二百十余は純と子の愛情が如何に深いものであるかを知ることの出来る、実に有意義な書である。

東野大八著

風流
人間横丁

価 250 円
送費 70 円

B
6
型
二
五
八
頁

★異常な戦争にまき込まれ隻手となって帰還した著者のザック・バランな人生批判が、その雄筆からほとばしるさまは凄い。まるで腕の冴えた板場の切れ味にも似ている。★本稿は戦後十三年間、「川柳雑誌」に掲載され、好評、サクサクたりしものに補筆した雄編である。後半に川柳に関する卓見もあり、肩の凝らぬ読物としてお勧めしたい。

高鷲亞鈍著

詩
川
柳
考

B 6型函入 定価三百八十円 送費九〇円

★著者は曾て創生期ごろの超現実主義者であつたがその詩論は詩人の民衆的立場を要請した／今は柳界にあつて庶民の詩人的自覚を促す／ここに川柳雜誌社が誇る現代川柳批評家として世に送る／凡そ前向作家を自負する柳俳人必読の書

★ご送金は振替口座をご利用が便利で安全です。(切手代用可)

発行所 大阪市住吉局区内
万代西5丁目25

川柳雜誌社

振替口座大阪75050
電話大阪(671)6081

Printed in Japan

募
集

課題吟募集

(十句以内)

手同化	酌棲粧	西尾	柴選
	(十句以內)		
	(十句以內)	田中	雀選
	(十句以內)	山川	茶選

初産
(十句以内)
菊沢小松園選

線路
（十句以内）
手さぐり
（十句以内）
長野井蛙選
本多柳志選

每号募集

近作柳樽
(雜詩廿句以內)
麻生路郎選

川柳塔
(雜詠十句以内)
麻生路郎選

文章（評論・研究・感想其他）

投稿規定

▼ 投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
▼ 「近作柳樽」は一般作家の雑吟を募る。
▼ 「課頌塔」は誰でも投句が出来る。「川柳塔」の投句は不朽洞会員に限る。

B列5号 毎月一回一日発行

川柳雜誌
第三十七年
第二十一号

定價九〇円

(送料六円)

半力年	五七六円	(千 共
一力年	八〇四	(千 共

昭和三十七年二月一日発行

大阪市住吉區内方代西五丁目二五番地

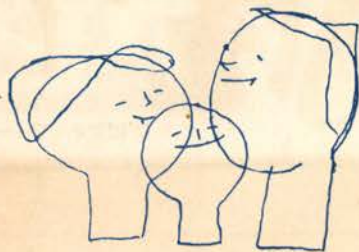
麻生幸二郎

大坂市住吉區内方代西五丁目二五番地

發行所
川柳雜誌社

電話大阪「671」六〇八一
振替口座大阪 七五〇五〇

一家そろつてホーライ党



廣東料理



大阪なんば・TEL 551-2

疲れをとり
抵抗力の強い
からだをつくる

高単位総合ビタミン・ミネラル剤

ポポン-S

20日分 350円・60日分 950円・120日分 1600円



塩野義製薬株式会社

★この1本で…
元気が
いっぱい



グロンサンの姉妹品「グロンサン内服液」が出
ました。大量のグロンサン(600錠)がグロンサン
士錠(錠)が、吸収されやすい液剤になっていま
すから、おのみに、効きめが、ハッキリわ
かっています。体力増強、疲労の回復、栄養の補
給、二日酔い、グロンサン錠と同様、広い範囲に
効きめをあらわします。
ことに、夜業・残業などの多い方、はげしい筋
肉労働に従事する方、お仕事・スポーツの前後に

1本—100円(もち運びに便利) 5本入もあります



東京・日本橋・本町
中外製薬

麻生路郎先生著

川柳とは何か

価
送費 二五〇円
七〇〇円

—川柳の作り方と味い方—

川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。
絶叫・嘆息・嘆声・嗚咽——そうしたもの
もろが十七音に圧搾された風刺と諧謔の短
詩型、それは伝統的であると共に常に革新
的である。その川柳がいかんして発生し、
経過し、今日に至り、将来に動くか、しか
もその作り方は、味い方は——以上を最
も明快にわかりやすく、斯界の第一人者た
る著者が答えているのが本書である。

取次所

川柳雑誌社

至文堂

東京都新宿区弘方町27 振替東京29507